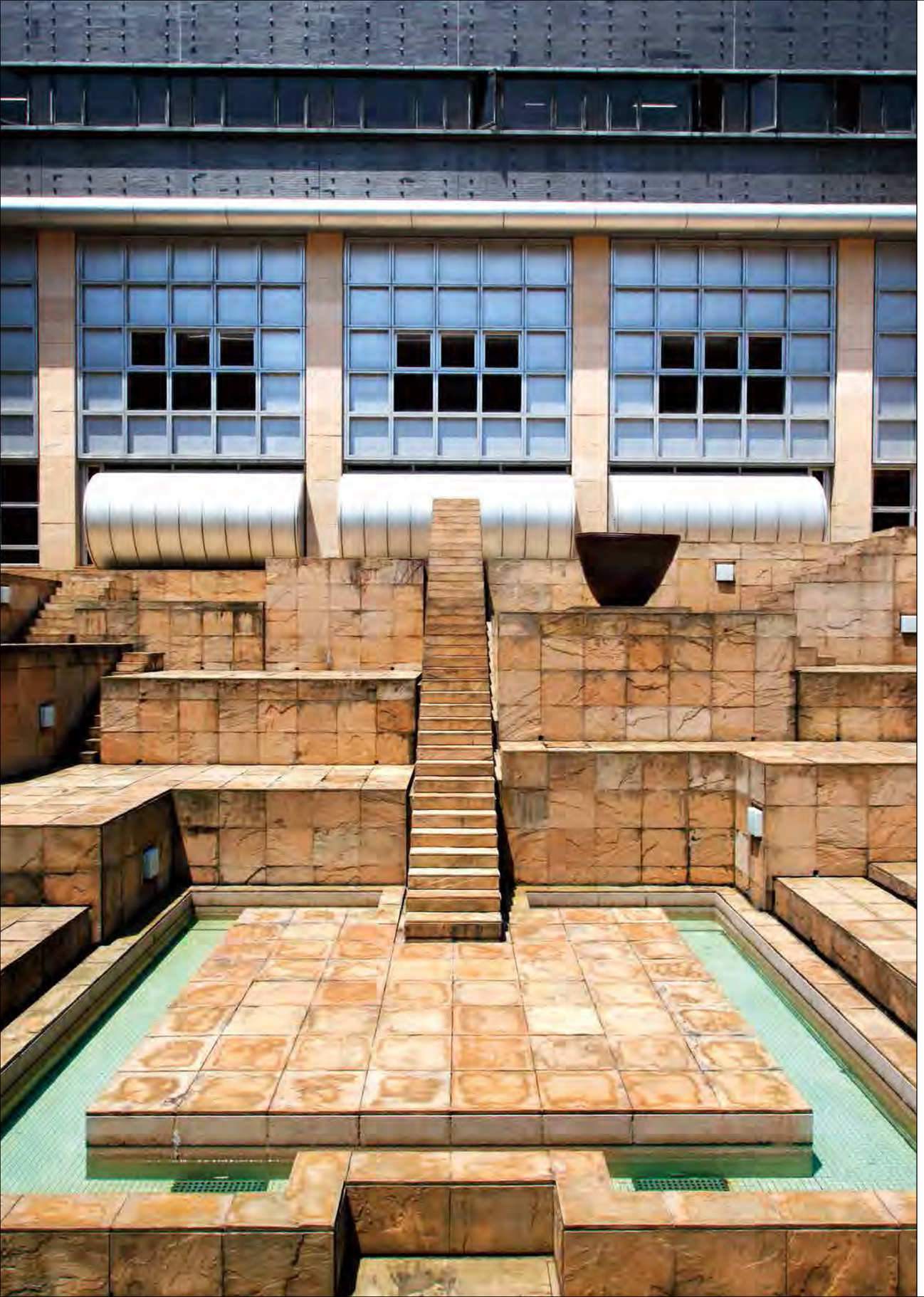
NIHU

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立民族学博物館

要覧

2019



国立民族学博物館

要覧 2019

ごあいさつ

国立民族学博物館（みんぱく）は、文化人類学・民族学とその関連分野の大学共同利用機関として1974年に創設され、1977年に大阪・千里の70年万博跡地に開館しました。去る2017年に開館40周年を迎え、来る2024年には創設50周年を迎えることになります。

みんぱくの研究者たちは、それぞれが世界各地でフィールドワークに従事し、人類文化の多様性と共通性、そして地球規模での社会の動態について調査研究を続けています。また、みんぱくには、総合研究大学院大学（総研大）文化科学研究科の二つの専攻、地域文化学専攻と比較文化学専攻がおかれています。文化人類学関係の単体の教育研究機関として、世界全域をカヴァーする研究者の陣容と研究組織をもつという点で、みんぱくは世界で唯一の存在といえます。

一方で、みんぱくがこれまでに収集してきた標本資料、モノの資料は、現在、約34万5千点を数えます。これは、20世紀後半以降に築かれた民族学コレクションとしては世界最大のものです。また、博物館施設の規模の上で、みんぱくは、世界最大の民族学博物館となっています。

人類の文明は、今、数百年来の大きな転換点を迎えているように思われます。これまでの、中心とされてきた側が周縁と規定されてきた側を一方的にまなざし、支配するという力関係が変質し、従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団の間に、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交錯・交流が至るところで起こるようになってきています。それだけに、人びとが、異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えてともに生きる世界を築くことが、これまでになく求められています。今ほど、他者への共感に基づき、自己と他者の文化についての理解を深める文化人類学の知が求められている時代はないように思われます。その知の国際的な中核拠点としてのみんぱくに課せられた責務は、きわめて大きいといわなければなりません。

みんぱくでは、こうした世界の変化を受けて、10年の年月を費やし、本館における世界諸地域の文化に関する常設展示の全面的な改修を進めてきました。その作業は、2017年3月で一応の完了をみましたが、同年4月からは、研究部の体制も全面的に改め、時代の要請に応じた新たな組織で研究活動を推進することにいたしました。現在、館を挙げて実施している特別研究「現代文明と人類の未来―環境・文化・人間」は、人類の抱える課題を分野を超えて多角的に検証し、未来への指針を探ろうというもので、すでにその成果の国際的な発信が始まっています。

全面改修を終えた本館展示も、さらなる更新を含めた次の段階をむかえます。次世代型電子ガイドと新世代ビデオテークとの連動、加えてウェブ上に展開する「みんぱくバーチャルミュージアム」との連携により、展示を糸口にして、みんぱくに蓄積されている研究情報を、利用者・研究者の皆さまそれぞれの関心に応じて自由に引き出せ、新たな探究につなげていくシステムを、2019年度に本格導入いたします。

みんぱくでは、また、現在、「フォーラム型情報ミュージアム」というプロジェクトを推進しています。このプロジェクトは、みんぱくの所蔵する標本資料や写真・動画などの映像音響資料の情報を、国内外の研究者や利用者ばかりでなく、それらの資料をもともと製作した地域の人びと、あるいはそれが写真なら、その写真が撮影された現地の人びとと共有し、そこから得られた知見を共にデータベースに加えて共有し、新しい共同研究や、共同の展示、コミュニティ活動の実現につなげていこうというものです。

これらの活動は、いずれも、かねてよりみんぱくがめざしてまいりました、さまざまな人びとの知的交流と発見、協働の場、つまり知のフォーラムを、研究教育活動・博物館活動を問わず、これまで以上に徹底したかたちで実現しようとするものです。

皆さまの、ご協力、ご支援を、心からお願い申し上げます。

国立民族学博物館長

目次

ごあいさつ	1
設置目的と機能	2
沿革	3
歴代館長／組織	4
研究活動	10
学術資源研究開発センター	23
国際研究統括室	24
博物館の共同利用	26
共同利用型科学分析室	27
資料・情報の整備と社会還元	28
資料とデータベース	28
展示	32
国際協力・研修	39
博物館社会連携	40
広報・事業	42
人間文化研究機構	46
基幹研究プロジェクト	48
総合研究大学院大学	50
利用案内	52

表紙
「ケンテ」（アフリカ）より

設置目的と機能

設置目的

本館は、文化人類学・民族学に関する調査・研究をおこなうとともに、民族資料の収集・整理・公開などの活動をすすめ、世界の諸民族の社会と文化に関する情報を人々に提供し、諸民族についての認識と理解を深めることを目的としています。 なお、本館は、大学共同利用機関として、国立学校設置法の一部を改正する法律（昭和49年法律第81号）により設置され、平成16（2004）年4月に国立大学法人法（平成15年法律第112号）により大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員として新たな出発をしました。

機能

研究所

本館は博物館機能をもった研究所です。 文化人類学・民族学を核とし、その隣接諸分野の研究をおこない、我が国の文化人類学・民族学研究のセンターとしてその機能を十分に発揮すると同時に、研究の成果を出版その他さまざまな形で公開し、研究者コミュニティと一般市民への情報提供と研究広報をおこなっています。 本館の研究者は、文化人類学・民族学や言語学、生態人類学、考古学、民族技術、民族芸術などを専門とするスタッフで構成されています。

共同利用

本館は大学共同利用機関として、研究者コミュニティに支えられた共同研究をおこなう開かれた研究所です。 また、収集・保管する資料は研究のために広く利用されています。

情報センター

研究に基づき、諸民族の生活を知るための標本資料、諸民族の社会と文化に関する映像・音響資料、文献図書資料、HRAF（Human Relations Area Files）などの諸資料を収集し、幅広い研究のための基礎的な資料や情報の整備をおこなっています。 これらに関する情報を、コンピュータを活用したデータベースの構築を通じて国内外の研究者へ提供しています。

展示公開

研究の成果を展示を通じて公開しています。 本館の研究者は、展示についての企画や実施にも参加しており、研究と展示の緊密な連携を基本方針としています。
本館展示は、世界の諸民族の文化と社会を大きく地域ごとに分けた地域展示と、音楽、言語などの人類文化に普遍的に見られる諸現象を対象とした通文化展示で構成されています。 また、急速に変化する世界の動きや、文化人類学・民族学の研究を迅速に展示に反映させるため、本館展示場内で企画展示も実施しています。
さらに、特定のテーマについて、総合的および体系的に紹介する特別展示を開催しています。

社会還元

最先端の研究成果を一般に公開するため、学術講演会、みんぱくゼミナール、みんぱくウィークエンド・サロン、研究公演、みんぱく映画会や種々のワークショップなどをおこなっています。 また、博物館学コースや技術研修などさまざまなプロジェクトを通して国際協力に貢献しています。

大学院教育

大学共同利用機関を基盤として設置された総合研究大学院大学の文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻、ともに博士後期課程）がおかれ、高度の大学院教育をおこない、創造性豊かな研究者を育成しています。 また、諸大学の要請に応えてそれぞれの大学院教育に協力し、また大学と連携して研究指導をおこなっています。

沿革

1935	昭和10年		澁澤敬三氏、白鳥庫吉博士を中心に財団法人日本民族博物館の設立を計画
1964	昭和39年	7月	日本民族学会、日本人類学会、日本考古学協会、日本民俗学会および日本民族学協会は、「国立民族学研究博物館設置」について、文部大臣など関係方面に要望
1972	昭和47年		民族学研究博物館の調査に関する会議（座長:桑原武夫）は、文部大臣に「民族学研究博物館の基本構想について（報告）」を提出
1973	昭和48年	4月	国立民族学研究博物館（仮称）の創設準備に関する会議および創設準備室を設置
1974	昭和49年	6月	国立学校設置法の一部を改正する法律（昭和49年法律第81号）の施行により、国立民族学博物館が創設（管理部3課6係、情報管理施設2係、5研究部10研究部門）
		8月	パプアニューギニアをはじめとして、海外における標本資料などの収集を開始
1975	昭和50年	12月	旧文部省史料館が所蔵していた民族資料28,432点を国文学研究資料館から移管
1977	昭和52年	11月	国立民族学博物館新営工事（28,778㎡および環境整備）が竣功、開館式典を挙行。 オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、音楽、言語、東南アジア、東アジア（日本の文化）展示およびビデオテークを一般公開
1978	昭和53年		民族学研究の拠点として、長期的・計画的に取り組む「特別研究」を開始
1979	昭和54年	3月	第4展示場（1,272㎡）が竣功、東アジア（日本の文化）展示を拡充し一般公開。 11月に中央・北アジア、東アジア（アイヌの文化）展示を一般公開
1981	昭和56年	2月	講堂（3,704㎡）が竣功
1983	昭和58年	3月	第8展示場など（4,816㎡）が竣功。 11月に東アジア（朝鮮半島の文化、中国地域の文化）展示を一般公開
1984	昭和59年	11月	創設10周年記念式典を挙行。『国立民族学博物館十年史』を刊行
1987	昭和62年		開館10周年を迎え、記念行事を実施
1989	平成元年	4月	総合研究大学院大学文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻の二専攻）が本館を基盤として設置
		6月	特別展示館・書庫棟（5,292㎡）が竣功
		9月	特別展示館竣功記念第1回特別展「大アンデス文明展―よみがえる太陽の帝国インカ」を一般公開
1993	平成5年	8月	本館増築・共同研究棟（891㎡）が竣功
1994	平成6年		創設20周年を迎え、記念行事を実施
		6月	地域研究企画交流センターを設置（平成17年度末に廃止）
1995	平成7年	1月	阪神・淡路大震災による被害のため、展示場を45日間にわたり全面閉鎖（2002～2003年に耐震改修工事を実施）
		4月	COE（「卓越した研究拠点」）の研究課題「地球時代におけるマルチメディアによる新しい民族学研究の展開に関する先導的研究」開始（平成11年度末に終了）
1996	平成8年	3月	第7展示棟（6,439㎡）が竣功。 11月に言語展示、東南アジア展示のリニューアルおよび映像の広場、ものの広場、南アジア展示を一般公開
1997	平成9年		開館20周年を迎え、記念行事を実施。 11月に記念式典を挙行
1998	平成10年	4月	大学共同利用機関組織運営規則の一部を改正する省令（平成10年文部省令第24号）の施行により、5研究部を改組（4研究部、1研究施設）
1999	平成11年	5月	みんぱく電子ガイドおよび学習コーナー完成、一般公開
2000	平成12年	3月	東アジア（朝鮮半島の文化）展示リニューアル、以降2003年まで本館展示の一部リニューアルなど
2004	平成16年	4月	国立大学法人法（平成15年法律第112号）の施行により、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構が発足 4研究部、1研究施設を、3研究部、2研究施設に改組 研究者コミュニティの代表を含む共同利用委員会による審査システム、公募の拡大など共同研究の体制を整備 本館の組織をあげて取り組む「機関研究」を開始
		6月	創設30周年記念事業として『国立民族学博物館三十年史』の編集を開始（平成18年3月刊行）
2006	平成18年	4月	民族学資料共同利用窓口を設置
2007	平成19年		開館30周年を迎え、記念行事を実施。11月に記念式典を挙行
2008	平成20年	2月	日本文化人類学会と連携事業に関する協定を締結
2009	平成21年	3月	西アジア、アフリカ展示を新構築、一般公開
2010	平成22年	3月	音楽、言語展示を新構築、一般公開
		4月	国際学術交流室の設置など新しい体制を整備
2011	平成23年	3月	オセアニア、アメリカ展示を新構築、一般公開
2012	平成24年	3月	ヨーロッパ展示、インフォメーション・ゾーンを新構築、一般公開
2013	平成25年	3月	東アジア（日本の文化「祭りと芸能」と「日々のくらし」）展示を新構築、一般公開
		4月	監査室、梅棹資料室を設置し、新しい体制を整備
2014	平成26年	3月	東アジア（朝鮮半島の文化、中国地域の文化、日本の文化「沖縄のくらし」と「多みんぞくニホン」）展示を新構築、一般公開
2015	平成27年	3月	南アジア、東南アジア展示を新構築、一般公開
2016	平成28年	6月	中央・北アジア、東アジア（アイヌの文化）展示を新構築、一般公開
2017	平成29年	3月	本館展示の新構築を完了し、記念式典を挙行
		4月	3研究部、2研究施設を、4研究部、1研究施設に改組 開館40周年を迎え、記念行事を実施。 11月に記念式典を挙行
		12月	共同利用型科学分析室を設置
2018	平成30年	6月	大阪府北部地震による被害のため、展示場を66日間にわたり全面閉鎖（図書室は49日間の閉室）

歴代館長／組織

歴代館長 平成31年4月1日現在

初代
昭和49年6月－平成5年3月
梅棹忠夫（故人）
民族学・比較文明論

第2代
平成5年4月－平成9年3月
佐々木高明（故人）
東・南アジア農耕文化史

第3代
平成9年4月－平成15年3月
石毛直道
文化人類学

第4代
平成15年4月－平成21年3月
松園万亀雄
社会人類学

第5代
平成21年4月－平成29年3月
須藤健一
社会人類学

第6代
平成29年4月－
吉田憲司
博物館人類学

運営組織 平成31年4月1日現在

館長
吉田憲司（よしだけんじ）

副館長（研究・国際交流・IR担当）
平井京之介（ひらいきょうのすけ）
グローバル現象研究部教授

副館長（企画調整担当）
關 雄二（せき ゆうじ）
人類文明誌研究部教授

館長補佐
西尾哲夫（にしおてつお）
グローバル現象研究部教授

監査室 室長（併）
島田健治（しまだけんじ）
管理部長

運営会議 平成31年4月1日現在

館長の要請により、本館の管理運営に関する重要事項について審議します。

窪田幸子
神戸大学大学院国際文化学研究科教授

栗本英世
大阪大学副学長

後藤 明
南山大学人文学部教授

佐野千絵
東京文化財研究所保存科学研究センター長

出口 顕
島根大学副学長

富沢寿勇
静岡県立大学国際関係学部
国際関係学科特任教授

豊田由貴夫
立教大学観光学部教授

松田素二
京都大学大学院文学研究科教授

山梨俊夫
国立国際美術館長

飯田 卓
国立民族学博物館人類文明誌研究部長

宇田川妙子
国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授
（総合研究大学院大学文化科学研究科
比較文化学専攻長）

關 雄二
国立民族学博物館副館長（企画調整担当）・
情報管理施設長

園田直子
国立民族学博物館人類基礎理論研究部長

野林厚志
国立民族学博物館
学術資源研究開発センター長

林 勲男
国立民族学博物館
超域フィールド科学研究部長

平井京之介
国立民族学博物館副館長
（研究・国際交流・IR担当）・
国際研究統括室長

三尾 稔
国立民族学博物館
グローバル現象研究部長

外部評価委員会 平成31年4月1日現在

館長の要請により、本館における研究教育活動等の状況に関する点検・評価について審議します。

安達 淳
国立情報学研究所副所長

池田博之
公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団理事長

大野 泉
独立行政法人国際協力機構JICA研究所長

八村廣三郎
立命館大学情報理工学部特任教授

堀井良殷
公益財団法人関西・大阪21世紀協会理事長

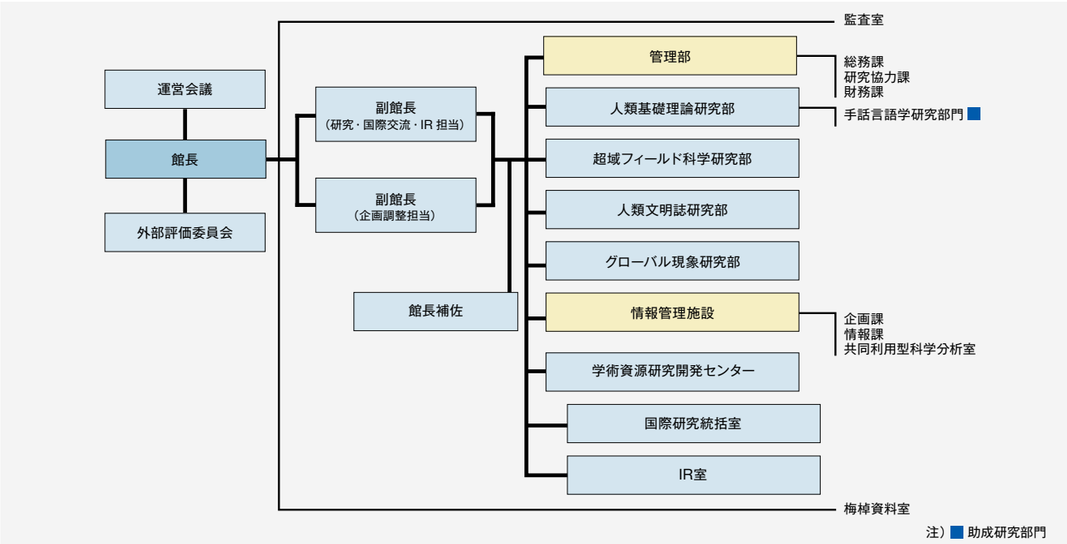
水沢 勉
神奈川県立近代美術館長

山極壽一
京都大学総長

山下晋司
東京大学名誉教授

山本真鳥
法政大学経済学部教授

組織構成図 平成31年4月1日現在



名誉教授 平成31年4月1日現在

昭和59年4月1日（称号授与年月日）
祖父江孝男（故人）
心理人類学

昭和60年4月1日
岩田慶治（故人）
文化人類学

昭和61年4月1日
加藤九祚（故人）
北・中央アジア民族史

昭和63年4月1日
伊藤幹治（故人）
宗教人類学

昭和63年4月1日
中村俊亀智（故人）
民族技術学・用具論

平成元年4月1日
君島久子
中国民間伝承

平成2年4月1日
和田祐一（故人）
言語人類学

平成3年4月1日
垂水 稔（故人）
空間領域の人類学

平成4年4月1日
杉本尚次
文化地理学・文化人類学

平成5年4月1日
梅棹忠夫（故人）
民族学・比較文明論

平成5年4月1日
大給近達（故人）
ラテンアメリカ文化構造

平成5年4月1日
片倉素子（故人）
社会地理学・民族学

平成6年4月1日
竹村卓二（故人）
社会人類学

平成7年4月1日
周 達生（故人）
物質文化論

平成7年4月1日
松澤員子
社会人類学

平成8年4月1日
大丸 弘（故人）
衣生活とその周辺の比較生活史

平成8年4月1日
友枝啓泰（故人）
社会人類学

平成8年4月1日
藤井知昭
民族音楽学・音楽人類学

平成9年4月1日
佐々木高明（故人）
東・南アジア農耕文化史

平成9年4月1日
杉村 棟
民族芸術学

平成10年4月1日
和田正平
比較文化論・アフリカ民族学

平成12年4月1日
清水昭俊
家族比較論・オセアニア研究

平成13年4月1日
黒田悦子
民族社会文化論・中米人類学

平成13年4月1日
崎山 理
言語人類学・オセアニア言語学

平成13年4月1日
端 信行
経済人類学・アフリカ民族学

平成14年4月1日
小山修三
民族考古学

平成14年4月1日
森田恒之
保存科学・民族技術

平成15年4月1日
石毛直道
文化人類学

平成15年4月1日
栗田靖之
博物館人類学・ブータン研究

平成15年4月1日
杉田繁治
コンピュータ民族学・文明学

平成16年4月1日
熊倉功夫
日本文化史

平成16年4月1日
立川武蔵
宗教哲学・仏教思想

平成16年4月1日
田邉繁治
東南アジア社会人類学

平成16年4月1日
藤井龍彦
新大陸先史学

平成16年4月1日
山田睦男（故人）
ラテンアメリカ史・
ラテンアメリカ地域研究

平成17年4月1日
江口一久（故人）
民族言語学・口承文芸論

平成17年4月1日
大塚和義
アイヌ民族学・北アジア研究

平成17年4月1日
松原正毅
社会人類学・遊牧社会論

平成18年4月1日
石森秀三
観光文明学・文化開発論

平成18年4月1日
野村雅一（故人）
身体コミュニケーション論・
南欧民族学

平成19年4月1日
大森康宏
映像人類学・民族誌映画

平成19年4月1日
山本紀夫
民族植物学

平成21年4月1日
松園万亀雄
社会人類学

平成22年4月1日
松山利夫
オーストラリア先住民研究

平成23年4月1日
長野泰彦
言語学・チベットビルマ語研究

平成24年4月1日
秋道智彌
生態人類学・海洋民族学

平成24年4月1日
中牧弘允
宗教人類学・経営人類学

平成26年4月1日
小林繁樹
道具人類学・文化人類学・
博物館学

平成26年4月1日
田村克己
東南アジア文化人類学

平成26年4月1日
吉本 忍
民族工芸論・民族技術論

平成27年4月1日
久保正敏
民族情報学・
コンピュータ民族学・
オーストラリア研究

平成27年4月1日
庄司博史
言語学・言語政策論

平成27年4月1日
八杉佳穂
言語人類学・中米文化史

平成28年4月1日
朝倉敏夫
韓国社会研究

平成28年4月1日
佐々木史郎
文化人類学・北アジア研究

平成28年4月1日
杉本良男
社会人類学、南アジア研究

平成29年4月1日
須藤健一
社会人類学

平成29年4月1日
竹沢尚一郎
宗教人類学・西アフリカ研究

平成29年4月1日
塚田誠之
歴史民族学・中国研究

平成30年4月1日
印東道子
オセアニア考古学

平成30年4月1日
横山廣子
文化人類学・中国社会研究

評価

本館は、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員として文部科学大臣が進める6年間の中期目標に基づく中期計画及び年度計画を策定し、その実施状況について国立大学法人評価委員会の評価を受けています。
上記の評価のほか、本館独自で自己点検・評価を実施しており、本館の研究教育活動等の状況をまとめた「自己点検報告書」を作成しています。
また、外部評価委員会を設けており、委員の意見ならびに委員会の記録、「自己点検報告書」などの関係資料を教職員をはじめ関係者に広く知らしめるとともに、館運営の改善に活用しています。

研究組織 平成31年4月1日現在

人類基礎理論研究部 部長 園田直子

人類科学の基礎分野を対象とする理論的研究の深化によって新たな学術的課題を抽出し、学融合的新領域を創出することを目的としています。
また、助成研究部門として、手話言語と音声言語の比較研究を進め、人間の言語に関する新しい知見に結びつけることを目的とした「日本財団助成手話言語学研究部門」を設置しています。

教授

園田直子
保存科学

出口正之
NPO・メセナ・フィランソロピー

日高真吾
保存科学

准教授

川瀬 慈
映像人類学

菊澤律子
言語学・オーストロネシア諸語

福岡正太
民族音楽学・東南アジア研究

丸川雄三
連想情報学・文化財情報発信

山本泰則
博物館情報学

吉岡 乾
言語学・南アジア研究

日本財団助成手話言語学研究部門

特任教授

飯泉菜穂子
手話通訳養成

特任助教

相良啓子
手話言語学類型論・聴覚障害児教育

超域フィールド科学研究部 部長 林 勲男

世界諸地域を対象とする地域エスノグラフィー的研究の深化によって新たな超域的研究基盤を確立し、人類学的地域研究の新領域を創出することを目的としています。

教授

宇田川妙子
南ヨーロッパ研究・性研究

榊永真佐夫
東南アジア文化人類学

韓 敏
社会人類学・中国研究

林 勲男
社会人類学・オセアニア研究

MATTHEWS, Peter J.
先史学・民族植物学

准教授

太田心平
社会文化人類学・北東アジア研究

菅瀬晶子
文化人類学・中東地域研究

松尾瑞穂
文化人類学・南アジア研究

新免光比呂
宗教学・東欧研究

奈良雅史
文化人類学・中国研究

人類文明誌研究部 部長 飯田 卓

現代の人類が直面する課題に関して、過去の事象から未来を見通す学際的アプローチによって未来文明を展望する新たな価値を創出することを目的としています。

教授

飯田 卓
生態人類学・漁民研究

池谷和信
環境人類学・南部アフリカ研究

齋藤 晃
ラテンアメリカ歴史人類学

鈴木 紀
開発人類学・ラテンアメリカ文化論

關 雄二
アンデス考古学・ラテンアメリカ研究

准教授

上羽陽子
民族芸術学・染織研究・手工芸研究

卯田宗平
環境民俗学・東アジア研究

小野林太郎
海洋考古学・東南アジア地域研究

寺村裕史
文化情報学・情報考古学

藤本透子
文化人類学・中央アジア地域研究

グローバル現象研究部 部長 三尾 稔

現代の人類が直面する課題に関して、地域の事象から世界を俯瞰する学際的アプローチによってグローバル社会を展望する新たな価値を創出することを目的としています。

教授

鈴木七美
医療人類学・医療社会史

西尾哲夫
認識言語学・アラブ研究

信田敏宏
社会人類学・東南アジア研究

平井京之介
経済人類学・東南アジア研究

三尾 稔
文化人類学・南アジア研究

森 明子
中部ヨーロッパ文化人類学

准教授

相島葉月
社会人類学・イスラーム学・中東研究

河合洋尚
社会人類学・漢族研究

廣瀬浩二郎
日本宗教史・民俗学

三島禎子
文化人類学・西アフリカ研究

助教

鈴木英明
インド洋海域史・スワヒリ社会研究

上記の各研究部は、第一超域(日本、東アジア、東南アジア、中央・北アジア)、第二超域(南アジア、西アジア、アフリカ)及び第三超域(ヨーロッパ、北米、中南米、オセアニア)を対象として調査・分析をおこなう研究スタッフからなる3つの研究ユニットを構成し、地球規模のパースペクティブによる研究戦略を遂行するものとなっております。
また、上記の各研究部による組織的研究力を強化し、共同利用・共同研究の面での機能強化を実現するために次の組織を設置しています。

学術資源研究開発センター センター長 野林厚志

学術資源の共同利用性を学際的かつ国際的に高めるための研究プロジェクトを立案し推進することを目的としています。

教授

岸上伸啓(併)
文化人類学・北方文化研究

笹原亮二
民俗学・民俗芸能研究

寺田吉孝
民族音楽学・インド研究

野林厚志
民族考古学・台湾研究

山中由里子
比較文学・比較文化

准教授

伊藤敦規
社会人類学・アメリカ先住民研究

齋藤玲子
アイヌ・北方先住民文化研究

丹羽典生
社会人類学・オセアニア地域研究

南 真木人
生態人類学・南アジア研究

助教

八木百合子
文化人類学・ラテンアメリカ地域研究

国際研究統括室 室長(併) 平井京之介

新領域の開拓のための共同利用型研究体制の基盤整備及び国際・国内戦略を立案し統括することを目的としています。

卯田宗平(兼)
人類文明誌研究部准教授

韓 敏(兼)
超域フィールド科学研究部教授

斎藤 晃(兼)
人類文明誌研究部教授

鈴木英明(兼)
グローバル現象研究部助教

丹羽典生(兼)
学術資源研究開発センター准教授

福岡正太(兼)
人類基礎理論研究部准教授

梅棹資料室

飯田 卓 室長(併)
人類文明誌研究部教授

客員教員

人類基礎理論研究部

宇陀則彦
筑波大学図書館情報メディア系准教授
文化資源の人文社会情報学的研究−高度情報化とデータベースの連携

日本財団助成手話言語学研究部門(附置)

原 大介
豊田工業大学工学部教授
手話言語における音節構造の成り立ちとその適格性条件に関する研究

人類文明誌研究部

小長谷有紀
独立行政法人日本学術振興会監事
モンゴル、中央・北アジアの遊牧文化の人類学的研究

特別客員教員

人類基礎理論研究部

下道基行
写真家／美術家
写真、動画資料の創造的な活用とアーカイブに関する研究

辻 邦浩
ナレッジキャピタルシニアディレクター
次世代型展示案内システムの構築

日本財団助成手話言語学研究部門(附置)

武居 渡
金沢大学人間社会研究域学校教育系教授
高等教育機関・学術機関における学術手話通訳者養成のしくみの研究

グローバル現象研究部

縄田浩志
秋田大学大学院国際資源学研究科教授
中東における自然資源の管理と物質文化の変容に関する研究

学術資源研究開発センター

大坂 拓
北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究職員
近現代におけるアイヌの物資文化の変容に関する研究

田森雅一
東京大学大学院総合文化研究科学術研究員
グローバル化と南アジア音楽文化の変容に関する人類学的研究

平井康之
九州大学大学院芸術工学研究院教授
ユニバーサルミュージアム構築の理論と実践

外国人研究員

JOHNSON, Robert Erik
キャロデット大学名誉教授(アメリカ合衆国)
令和元年5月18日〜令和元年7月13日
日本手話の音声学的研究：「動き」の諸類型

SOMFAI, David Istvan
ハンガリー科学アカデミー民族学研究所・博士研究員(ハンガリー)
平成30年11月1日〜令和元年9月30日
モンゴルと北東アジアのシャーマニズムに関する博物館フィールドワーク：過去と現在

WONG, Deborah Anne
カリフォルニア大学リヴァーサイド校・教授(アメリカ合衆国)
令和元年7月19日〜令和元年8月17日
民族音楽学におけるマイノリティ研究の再想像

ADI, Prasetijo
ディポネゴロ大学・上級講師(インドネシア)
令和元年7月19日〜令和元年8月17日
森林資源の変化と狩猟採集民の社会的レジリエンス−インドネシアの事例−

※平成31年度在籍または招聘予定(平成31年4月1日現在)の者。
アルファベット順。

機関研究員

大澤由実
博物館社会連携に係る支援業務

神野知恵
学術研究の高度化に係る支援業務

末森 薫
文化資源の共同利用に係る支援業務

古川不可知
学術情報の共同利用に係る支援業務

プロジェクト研究員

石原 和
日本財団助成手話言語学部門RA業務

石山 俊
写真資料のデジタル化作業および著作権処理業務

河村友佳子
文化資源計画事業「有形文化資源の保存・管理システム構築」に係る補助業務

小林直明
写真資料のデジタル化作業および著作権処理業務

橋本沙知
文化資源計画事業「有形文化資源の保存・管理システム構築」に係る補助業務

彭 宇潔
民族誌資料の調査・研究と計画研究の運営補助

人間文化研究機構 推進センター研究員

南アジア地域研究拠点

菅野美佐子
特任助教

田中鉄也
特任助教

北東アジア地域研究拠点

辛嶋博善
特任助教

現代中東地域拠点

黒田賢治
特任助教

人間文化研究機構 総合情報発信センター研究員

人文知コミュニケーター

大石侑香
特任助教

外来研究員 平成30年度

本館では、国内外の研究者を外来研究員として受け入れています。 平成30年度は、15の国・地域からの23人の外国籍の研究者を含む、114人の研究者を受け入れました。

特別共同利用研究員 平成30年度

本館は、大学共同利用機関として全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該学生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れています。 特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて、本館の指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するとともに、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）の教育プログラムに一部参加することができます。 平成30年度は、国立大学より3名、私立大学より1名受け入れました。

事務組織 平成31年4月1日現在

管理部 部長 島田健治（しまだけんじ）

情報管理施設 施設長（併） 關 雄二（せき ゆうじ）
副施設長（併） 島田健治（しまだけんじ）

総務課
課長
恒吉祐治（つねよしゆうじ）

課長補佐
中野哲也（なかのてつや）

研究協力課
課長
西山和彦（にしやまかずひこ）

課長補佐
梶原孝次（かじわらこうじ）

財務課
課長
前田一之（まえだかずゆき）

課長補佐
伊藤眞一（いとうしんいち）

企画課
課長
包国征治（かねくにせいじ）

課長補佐
南野晋也（みなみのしんや）

情報課
課長
今中弘幸（いまなかひろゆき）

課長補佐
中村 太（なかむら ふとし）

現員
平成31年4月1日現在

区分	館長	教授	准教授	助教	特任教授	特任准教授	特任助教	小計	事務職員 技術職員含む	合計
現員	1	23	24	2	1	0	1	52	51	103
客員（国内）		6	4					10		10
客員（国外）		1						1		1
館長	1							1		1
監査室									1(1)	1(1)
管理部									29	29
情報管理施設									21	21
研究部		19	20	1	1	0	1	42		42
学術資源研究開発センター		4	4	1				9		9

注）客員は外数　（　）内は兼務　事務職員には特任専門職員1名を含む

予算

平成30年度

収入

区分	単位：百万円
運営費交付金	2,613
基幹運営費交付金	2,281
特殊要因運営費交付金	229
機構連携経費等	103
収入	40
入場料	26
その他	14
施設整備費補助金	43
科学研究費補助金	304
計	3,000

注）補正後の予算額

支出

区分	単位：百万円
人件費	1,112
物件費	1,584
教育研究経費	395
共同利用経費	595
一般管理費	459
施設費	135
科学研究費補助金	304
計	3,000

注）補正後の予算額

令和元年度

収入

区分	単位：百万円
運営費交付金	2,476
基幹運営費交付金	2,476
	229
収入	44
入場料	28
その他	16
計	2,520

注）年度計画予算額

支出

区分	単位：百万円
人件費	1,131
物件費	1,389
教育研究経費	271
共同利用経費	658
一般管理費	460
計	2,520

注）年度計画予算額

施設

建設の基本構想

敷地全体が公園計画に調和するように、建物の高さを全体的にできる限り低くおさえ、伝統的な日本建築のもつ美の特色を活かしています。
平面計画は複数のブロックによって構成されており、それぞれのブロック外壁は原則として採光をおこなわないことになっていますが、展示場の内側には採光が可能なパティオ（中庭）を設けています。
各パティオは、建築内部に屋外の環境を持ち込むばかりでなく、屋外展示スペースとしても利用することができます。
動線計画は、1階に収蔵、2階に展示、3・4階に研究の機能をまとめて配置し、エレベータ・階段で垂直に最短距離で結んでいます。
とくに展示のための観客の動線は、全体を詳細にみることも、一部分展示ブロックを簡略してみることも可能な回遊方式になっています。
また、ユニバーサルデザインを積極的に導入し、点字ブロックの設置などバリアフリー化をおこなっています。

施設の概要

敷地面積=40,821㎡
建築面積=18,177㎡
建築延床面積=52,648㎡

4階 7,207㎡
研究部門

3階 中3、中4階を含む 7,340㎡
研究・図書・管理部門

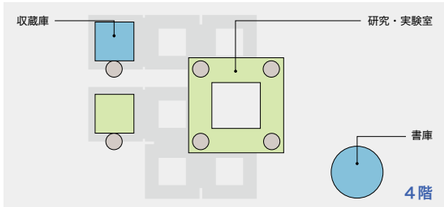
屋階 846㎡

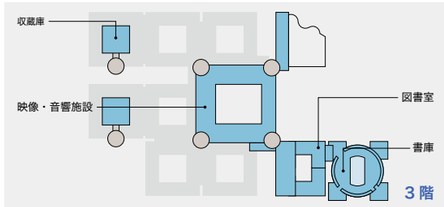
2階 中2階を含む 16,830㎡
展示・管理部門

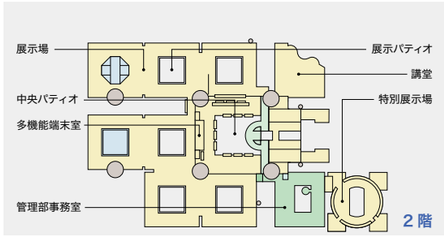
1階 多機能資料保管庫含む 17,410㎡
エントランス・収蔵・サービス部門

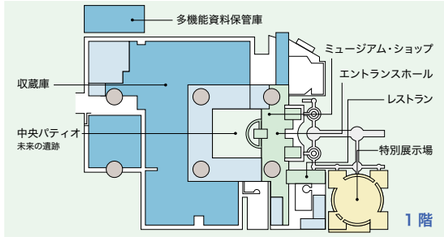
地階 3,015㎡

（内 本館展示場 10,938㎡ 特別展示場 1階 851㎡ 2階 639㎡ ）









特別研究

特別研究は、平成28年度から始まった第3期中期目標期間の6年間を通じて、「現代文明と人類の未来―環境・文化・人間」を統一テーマに、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究です。

近現代のヨーロッパに発する科学・技術、政治・経済制度、社会組織、思想などからなる西欧文明は、世界の多くの国と地域に影響を与え、科学・技術の発展は、人類の生活と社会を豊かにすると信じられてきました。しかし、人口増加、環境破壊、戦争、資源枯渇、水不足、大気汚染など、大きな負の代償を人類社会にもたらしているとも言えます。特に環境問題と人口増加は、解決を要する大きな課題です。前者は、生活空間・食料資源・生物の多様性から、戦争・公害・地球温暖化・災害など、人間生活のあらゆる面に影響を及ぼしています。後者は、2060年には100億人を超え、2100年には地球の人口支持力（環境収容力）120億人に近づく一方、先進国では少子高齢化が進み、家族や人間集団の維持・存続に多くの問題をもたらしています。このような状況において、文明に対応してきた現地社会の「知」から現代文明を問い直すために、特別研究を現代の人類社会が直面する諸課題の分析と解決を志向する研究として位置づけ、環境問題や人口をめぐる地球規模の変動について直接的・間接的に起因する対立軸となる文化現象を設定します。グローバル空間・地域空間・社会空間が構成する多層的生活空間における現代的問題系としてアプローチすることで、旧来の（伝統的な）価値から、いかに多元的価値の共存を保障する社会を創成することができるかを解明し、人類社会にとって選択可能な問題解決を志向する未来ビジョンを提出することをめざします。

平成28年度実施プロジェクト

プロジェクトリーダー	プロジェクト名
池谷和信・岸上伸啓	生物・文化的多様性の歴史生態学―稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に―

平成29年度実施プロジェクト

プロジェクトリーダー	プロジェクト名
池谷和信・岸上伸啓	生物・文化的多様性の歴史生態学―稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に―
野林厚志	食料生産システムの文明論

平成30年度実施プロジェクト

プロジェクトリーダー	プロジェクト名
池谷和信・岸上伸啓	生物・文化的多様性の歴史生態学―稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に―
野林厚志	食料生産システムの文明論
寺田吉孝	パフォーミング・アーツと積極的共生

国際シンポジウム

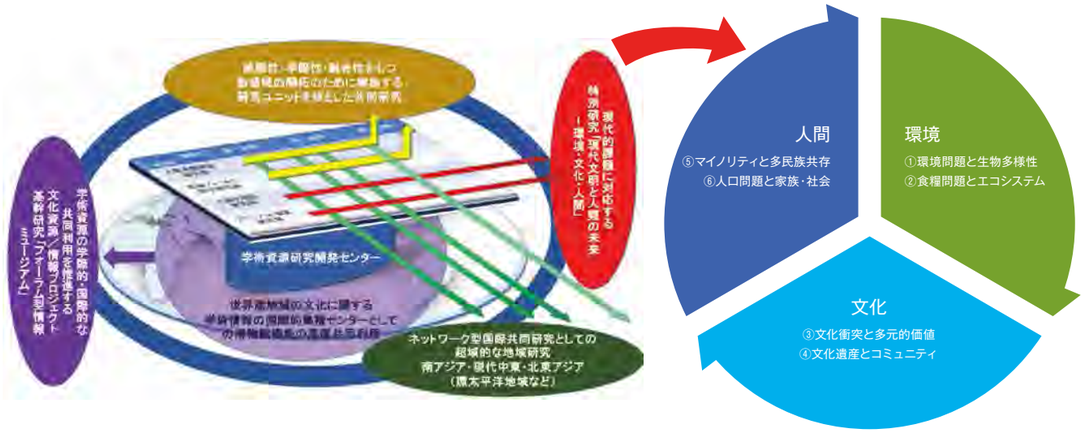
“Making Food in Human and Natural History”

実施日　平成31年3月18日～20日
研究代表者　野林厚志
参加者総数　43名

学術講演会

「みんぱく公開講演会　音楽から考える共生社会」

実施日　平成30年11月2日
研究代表者　寺田吉孝
参加者総数　336名



特別研究一覧　平成28年度～令和3年度

統一テーマ「現代文明と人類の未来―環境・文化・人間」

【テーマ区分・環境】

研究代表者	研究プロジェクト	区分	研究期間
池谷和信・岸上伸啓	生物・文化的多様性の歴史生態学 ―稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に―	①環境問題と生物多様性	平成28年7月～平成31年3月
野林厚志	食料生産システムの文明論	②食糧問題とエコシステム	平成29年4月～令和2年3月

【テーマ区分・文化】

研究代表者	研究プロジェクト	区分	研究期間
西尾哲夫	グローバル時代における文化衝突と多元的 価値共創社会の可能性」（仮題）	③文化衝突と多元的価値	令和2年4月～令和5年3月
飯田 卓	デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティと コミュニティ	④文化遺産とコミュニティ	平成31年4月～令和4年3月

【テーマ区分・人間】

研究代表者	研究プロジェクト	区分	研究期間
寺田吉孝	パフォーミング・アーツと積極的共生	⑤マイノリティと多民族共存	平成30年4月～令和3年3月
	人口変動と地域社会・文化の持続性（仮題）	⑥人口問題と家族・社会	令和3年4月～令和6年3月

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築
（人間文化研究機構　機関拠点型基幹研究プロジェクト）

みんぱくでは、開館以来世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきました。 併せて、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら民族資料と関連情報について国際共同研究を推進しています。 私たちは、それらの資料と関連情報を「人類の文化資源」として同時代の人びとと共有し、かつ後世に伝えたいと考えています。 この実現のため、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の発信、交換、生成、共有化を図ります。 このミュージアムによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えます。 5年目となる平成30年度は、開発型プロジェクト4件、強化型プロジェクト5件、合わせて9件のプロジェクトを実施しました。 また、研究の国際化を推進するために国際発信プログラムを新設し、平成30年度は成果刊行物として『財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）関係人名の研究』と『天理大学附属天理参考館収蔵24点の「ホピ製」資料熟覧　ソースコミュニティと博物館資料との「再会」2』を出版しました。 なお、この事業は人間文化機構機関拠点型基幹研究プロジェクトとして位置づけされています。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト　平成30年度

代表者	プロジェクト名	区分	期間
野林厚志	台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応	開発型	平成27年4月～平成31年3月
齋藤玲子	民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討	開発型	平成28年4月～令和2年3月
飯田 卓	アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	開発型	平成29年4月～令和3年3月
寺村裕史	中央・北アジアの物質文化に関する研究―民博収蔵の標本資料を中心に	開発型	平成30年4月～令和4年3月
西尾哲夫	中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース	強化型	平成29年4月～平成31年3月
太田心平	朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究	強化型	平成29年4月～令和2年3月
八木百合子	中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築	強化型	平成30年4月～令和2年3月
丹羽典生	民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築―オセアニア資料を中心に	強化型	平成30年4月～令和2年3月
南 真木人	ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築	強化型	平成30年4月～令和2年3月

推進しているプロジェクト

1. 開発型プロジェクト

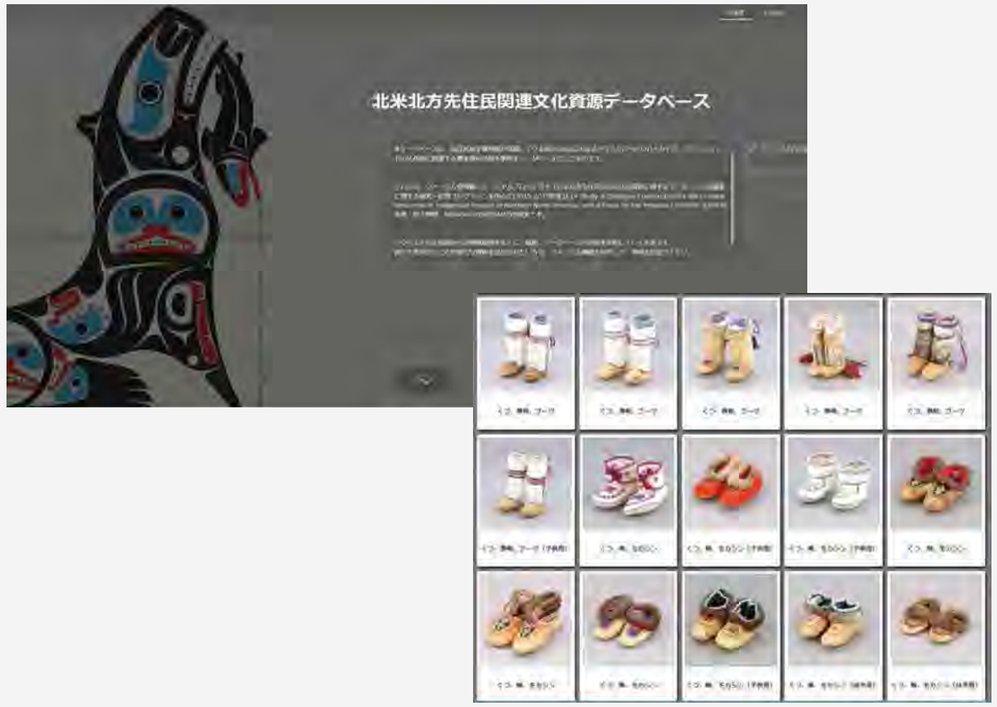
国内外の協定機関と連携しながら文化資源に関する各機関が持つ情報を共有化し、それをもとに国際共同研究を実施しつつ、データベースのコンテンツを作成するものです。 データベースの構築にあたって、共通項目以外は、画像、音声資料の活用を進めています。

2. 強化型プロジェクト

民博の文化資源に関する既存の情報を整理し、新しい情報を付加し、精緻化することによって、既存のデータベースをさらに高度化するものです。

国際発信プログラムによる成果刊行物

データベースを活用したソース・コミュニティにおける文化継承の取り組み： 徳之島西阿木名小学校での「徳之島の唄と踊り」データベースの活用



公開中のデータベース。 みんぱくホームページ内「フォーラム型情報ミュージアム」からアクセス可能。

共同利用型研究

共同研究

文化人類学･民族学および関連分野の特定のテーマについて館内外の専門家が共同でおこなう研究です。
平成30年度は、館外より国立大学152名、公立大学15名、私立大学146名、民間機関など66名の専門家とともに研究をおこないました（平成31年3月現在）。

平成30年度　共同研究課題　○印は館外研究者による実施課題

【一般】

	研究代表者	研究課題	研究期間	共同研究員数 館内	国立大学	公立大学	私立大学	民間機関など	総計
		課題１：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究							
	松尾瑞穂	グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	平成27年10月1日～令和2年3月31日	2	7	2	2	0	13
	山中由里子	驚異と怪異――想像界の比較研究	平成27年10月1日～平成31年3月31日	3	3	0	8	5	19
	丹羽典生	応援の人類学――政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌	平成27年10月1日～平成31年3月31日	3	7	1	10	0	21
○	ERTL, John	考古学の民族誌――考古学的知識の多様な形成･利用･変成過程の研究	平成27年10月1日～平成31年3月31日	4	6	0	2	6	18
○	岡田浩樹	宇宙開発に関する文化人類学からの接近	平成27年10月1日～平成31年3月31日	3	4	2	5	1	15
○	中原聖乃	放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究	平成27年10月1日～平成31年3月31日	2	3	0	5	6	16
○	飯田淳子	医療者向け医療人類学教育の検討――保健医療福祉専門職との協働	平成27年10月1日～平成31年3月31日	3	6	0	5	4	18
○	齋藤 剛	個－世界論――中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム	平成27年10月1日～平成31年3月31日	2	8	1	4	0	15
○	市野澤潤平	確率的事象と不確実性の人類学――「リスク社会」化に抗する世界像の描出	平成27年10月1日～平成31年3月31日	1	5	0	7	0	13
	岸上伸啓	捕鯨と環境倫理	平成28年10月1日～令和2年3月31日	2	8	1	3	4	18
	卯田宗平	もうひとつのドメスティケーション――家畜化と栽培化に関する人類学的研究	平成28年10月1日～平成31年3月31日	3	9	1	3	3	19
	出口正之	会計学と人類学の融合	平成28年10月1日～平成31年3月31日	4	3	0	6	1	14
	廣瀬浩二郎	「障害」概念の再検討――触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて	平成28年10月1日～平成31年3月31日	2	1	0	7	5	15
○	野澤豊一	音楽する身体間の相互作用を捉える――ミュージッキングの学際的研究	平成28年10月1日～令和2年3月31日	4	7	1	5	0	17
○	浮ヶ谷幸代	現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	平成28年10月1日～令和2年3月31日	1	1	0	3	4	9
○	中生勝美	人類学/民俗学の学知と国民国家の関係――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	平成29年10月1日～令和3年3月31日	3	7	0	5	1	16
○	中川 敏	文化人類学を自然化する	平成29年10月1日～令和3年3月31日	2	8	0	1	0	11
○	田沼幸子	ネオリベラリズムのモラリティ	平成29年10月1日～令和3年3月31日	2	4	1	5	0	12
○	風間計博	オセアニア･東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	平成30年10月1日～令和4年3月31日	2	6	2	4	1	15
○	中谷文美	伝統染織品の生産と消費――文化遺産化･観光化によるローカルな意味の変容をめぐって	平成30年10月1日～令和4年3月31日	2	4	0	6	1	13
○	西 真如	心配と係り合いについての人類学的探求	平成30年10月1日～令和4年3月31日	1	6	0	6	0	13
○	佐川 徹	統治のフロンティア空間をめぐる人類学――国家･資本･住民の関係を考察する	平成30年10月1日～令和4年3月31日	2	4	0	7	1	14
○	山 泰幸	グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ･ポリティクス	平成30年10月1日～令和4年3月31日	1	5	1	6	1	14
○	内藤直樹	カネとチカラの民族誌:公共性の生態学にむけて	平成30年10月1日～令和4年3月31日	2	9	0	6	0	17
		課題２：本館の所蔵する資料（標本資料、文献資料、映像音響資料等）に関する研究							
	長野泰彦	チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究	平成27年10月1日～平成31年3月31日	3	3	0	5	1	12
	縄田浩志	物質文化から見るアフロ･ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	平成28年10月1日～令和2年3月31日	2	4	0	5	4	15
	園田直子	博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から	平成29年10月1日～令和3年3月31日	7	1	0	0	7	15
			計	68	139	13	131	56	407

【若手】

	研究代表者	研究課題	研究期間	共同研究員数 館内	国立大学	公立大学	私立大学	民間機関など	総計
		課題１：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究							
○	大石高典	消費からみた狩猟研究の新展開――野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究	平成28年10月1日～平成31年3月31日	2	6	0	6	2	16
○	平田晶子	テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	平成28年10月1日～令和2年3月31日	2	2	1	4	0	9
	八木百合子	モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相	平成29年10月1日～令和2年3月31日	1	3	0	4	4	12
○	藤田瑞穂	拡張された場における映像実験プロジェクト	平成30年10月1日～令和3年3月31日	1	2	1	1	4	9
			計	6	13	2	15	10	46
			合計	74	152	15	146	66	453

共同研究会の公開

平成16年度より共同研究会の一部が、一般向けに公開されています。平成30年度実績は以下のとおりです。

開催日	研究会名	場所	参加者数
平成30年5月12日（土）	会計学と人類学の融合	国立民族学博物館 2階 第4セミナー室	20
平成30年5月13日（日）	捕鯨と環境倫理	国立民族学博物館 2階 第4セミナー室	32
平成30年11月30日（金）～12月2日（日）	捕鯨と環境倫理	国立民族学博物館 2階 第4セミナー室	62
平成31年2月22日（金）	物質文化から見るアフロ･ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	国立民族学博物館 2階 第4セミナー室	22

捕鯨と環境倫理

科学研究費助成事業による研究プロジェクト

科学研究費助成事業は、我が国の学術を振興するため、人文・社会科学から自然科学まであらゆる分野における優れた独創的・先駆的な研究を格段に発展させることを目的とする研究助成費で、大学などの研究者または研究者グループが自発的に計画する基礎的研究のうち、学術研究の動向に即して特に重要なものを取り上げ、研究費の助成をするものです。

令和元年度採択課題

研究種目		研究代表者	研究課題	配分額（千円）
継続	新学術領域研究 （研究領域提案型）	野林厚志	人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築	23,790
			計1件	23,790
継続	新学術領域研究 『学術研究支援基盤形成』	吉田憲司	地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化 （支援機能：地域研究画像デジタルライブラリ（DiPLAS））	39,000
			計1件	39,000
継続	※国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化）	竹村嘉晃	移民の身体ポリティクス：インド舞踊のグローバル化とエージェンシー	15,340
	※国際共同加速基金（国際共同研究強化）は、平成30年度～令和2年度配分額		計1件	15,340
継続	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化B）	菊澤律子	時空間を融合する：GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ	3,770
	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化B）	小野林太郎	オセアニアの人類移住と島嶼間ネットワークに関わる考古学的研究	4,550
			計2件	8,320
継続	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化A）	松尾瑞穂	遺伝子化時代の社会集団のカテゴリー化と差異化―インドにおける血と遺伝子を中心に	13,130
	※国際共同加速基金（国際共同研究強化A）は、令和元年度～令和3年度配分額		計1件	13,130
継続	基盤研究（A）	須藤健一	ネットワーク型博物館学の創成	7,800
継続	基盤研究（A）	吉田憲司	アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究	10,010
継続	基盤研究（A）	齋藤 晃	アンデスにおける植民地的近代―副王トレドの総集住化の総合的研究	3,510
継続	基盤研究（A）	長野泰彦	チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究	7,540
継続	基盤研究（A）	關 雄二	アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築	10,140
継続	基盤研究（A）	小長谷有紀	モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築	7,410
継続	基盤研究（A）	山中由里子	超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築	9,750
継続	基盤研究（A）	林 勲男	大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育	5,590
新規	基盤研究（A）	岸上伸啓	北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究	9,100
			計9件	70,850
継続	基盤研究（B）	西尾哲夫	中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化	3,640
継続	基盤研究（B）	西尾哲夫	シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究	3,120
継続	基盤研究（B）	MATTHEWS, Peter J.	東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証	3,510
継続	基盤研究（B）	日高真吾	教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存	4,940
継続	基盤研究（B）	園田直子	セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発	5,330
新規	基盤研究（B）	飯田 卓	文化遺産の「社会的ふるまい」に関する応用人類学的研究：東部アフリカを事例に	6,110
新規	基盤研究（B）	上羽陽子	バスケタリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究	3,640
新規	基盤研究（B）	末森 薫	再現模写・仮想空間構築による敦煌莫高窟千仏図が有する規則的描写の複合的評価	8,840
新規	基盤研究（B）	寺村裕史	シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する考古学的研究	6,630
新規	基盤研究（B）	丹羽典生	紛争後社会のレジリエンス：オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析	3,120
			計10件	48,880
継続	基盤研究（C）	笹原亮二	本州とその周辺の島々及び多島海的海域における民俗芸能の研究	910
継続	基盤研究（C）	卯田宗平	ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論：新たな人・動物関係論の構築と展開	780
継続	基盤研究（C）	藤本透子	カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究	780
継続	基盤研究（C）	杉本 敦	農の「EU化」に伴うトランシルヴァニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究	650
継続	基盤研究（C）	永田貴聖	京都市東九条における日本人・在日コリアン・フィリピン人の関係形成についての人類学	1,040
継続	基盤研究（C）	新本万里子	生理用品の受容によるケガレ観の変容に関する文化人類学的研究	1,170
継続	基盤研究（C）	伊藤 悟	中国西南タイ民族における詩的オラリティの継承と創造的実践に関する研究	1,300
継続	基盤研究（C）	廣瀬浩二郎	触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究	1,300
継続	基盤研究（C）	中道静香	『千夜一夜』をめぐる写本・刊本の編纂過程と書物文化の諸相	650
継続	基盤研究（C）	盛 恵子	セネガル、ニアセン教団における女性の宗教的権威の伸張	1,300
継続	基盤研究（C）	川瀬 慈	アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究	1,040
継続	基盤研究（C）	福岡正太	島嶼社会における芸能伝承の課題―対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ	1,170
継続	基盤研究（C）	平井京之介	ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究	780
継続	基盤研究（C）	鈴木七美	米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開	1,040
継続	基盤研究（C）	野嶋洋子	無形文化遺産の継承・変容と自然災害による影響の動態的把握：バヌアツ北部事例研究	1,040
継続	基盤研究（C）	山田香織	アートツーリズムのエスノグラフィー：地方国際芸術祭の深化と拡充の理論化に向けて	910
新規	基盤研究（C）	岡本尚子	未発表原稿分析によるJ.-C.マルドリュスの執筆過程の解明	1,040
新規	基盤研究（C）	河合洋尚	中国―南太平洋島嶼国関係の変化と「オセアニアン・チャイニーズ」像の表出	780
新規	基盤研究（C）	相良啓子	日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明	1,560
新規	基盤研究（C）	常田夕美子	インド・オディシャーにおける親密圏の変容：恋愛・婚姻・家族をめぐる情動と経験	1,300
新規	基盤研究（C）	中村真里絵	世界遺産バンチェン遺跡の遺物の古美術品化とその価値づけをめぐる文化人類学的研究	1,170
新規	基盤研究（C）	三尾 稔	インド西部の地方都市における宗教実践とローカリティ形成に関する人類学的研究	910
			計22件	22,620

研究種目		研究代表者	研究課題	配分額（千円）
継続	若手研究（A）	鈴木博之	チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究	2,860
			計1件	2,860
継続	若手研究（B）	松尾瑞穂	現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究	520
継続	若手研究（B）	登 久希子	社会をつくる芸術：「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究	800
継続	若手研究（B）	相島葉月	エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究	1,040
継続	若手研究（B）	八木百合子	アンデスにおける聖人信仰の展開に関する人類学的研究：聖像の所有と継承に注目して	780
継続	若手研究（B）	栗山新也	三線が引き出す社会関係、価値、感情――大衆楽器が人びとに与える効果の研究	910
継続	若手研究（B）	鈴木英明	20世紀前半ペルシア湾における「奴隷解放調書」の研究	1,040
			計6件	5,090
継続	若手研究	黒田賢治	現代イランにおける長期的紛争介入構造をめぐる殉教概念の変容と政治言説化の研究	1,300
継続	若手研究	彭 宇潔	アフリカ熱帯雨林における狩猟採集民の生態資源獲得の行動に関する人類学的研究	1,170
継続	若手研究	萩原卓也	身体性を基盤とした他者との共存の可能性を探求する：ケニアの自転車競技選手を事例に	1,820
継続	若手研究	神野知恵	近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷-伊勢大神楽と韓国農楽を中心に-	1,170
新規	若手研究	大石侑香	肉食性動物のドメスティケーション：毛皮産業近代化における人と動物の関係の変化	1,430
新規	若手研究	早川真悠	レソトにおけるジンバブエ移民行商人の会計方法にかんする人類学的研究	1,300
新規	若手研究	奈良雅史	宗教と移動をめぐる人類学的研究：現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク	1,170
			計7件	9,360
継続	挑戦的研究（開拓）	出口正之	個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究	6,630
			計1件	6,630
継続	挑戦的研究（萌芽）	竹沢尚一郎	被災後社会の総体的研究：被災後をより良く生きるための行動指針の開発	2,990
継続	挑戦的研究（萌芽）	神田和幸	新手話学の構成素の実証的検証研究	3,120
継続	挑戦的研究（萌芽）	川口 聖	日本手話言語の変質に関する研究	2,470
			計3件	8,580
継続	研究活動スタート支援	古川不可知	ヒマラヤ東部地域における輸送インフラの発展と移動する身体に関する人類学的研究	1,100
継続	研究活動スタート支援	大澤由実	食の認識体系とその変容：タイにおけるMSG（グルタミン酸ナトリウム）の消費と拒絶	900
			計2件	2,000
新規	研究成果公開促進費	末森 薫	敦煌莫高窟と千仏図	1,600
新規	研究成果公開促進費	齋藤 晃	宣教と適応―グローバル・ミッションの近世	2,600
新規	研究成果公開促進費	古川不可知	「シェルパ」と道の人類学	900
新規	研究成果公開促進費	河合洋尚	＜客家空間＞の生産	1,700
継続	研究成果公開促進費	久保正敏	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	3,800
新規	研究成果公開促進費	高橋晴子	服装・身装文化デジタルアーカイブ	6,200
新規	研究成果公開促進費	山中由里子	ゴミから生まれる異音獣！	500
	研究成果公開発表（B）		不思議なケモノはどんな音？ 不思議な音は何に見える？	
			計5件	17,300
継続	特別研究員奨励費	上畑 史	セルビアにおけるポップフォークと民俗音楽の比較分析による文化的連関の研究	1,430
継続	特別研究員奨励費	藤井真一	贈与交換による平和の構築・維持・再生産に関する人類学研究―ソロモン諸島の事例から	1,430
継続	特別研究員奨励費	松岡佐知	高齢期の人間にとっての居住型宗教施設の役割：南インドの事例から	1,300
継続	特別研究員奨励費	額田有美	ラテンアメリカ地域における「先住民性」についての民族誌的研究：コスタリカを中心に	1,430
新規	特別研究員奨励費	稲井啓之	アフリカ内水面における「よそ者」に着目した持続的水産資源管理構築に関する研究	1,690
新規	特別研究員奨励費	崎田誠志郎	東地中海域における小規模漁業の漁場利用生態と漁場管理制度の統合的解明	1,820
			計6件	9,100
			総計81件	302,850

地域研究画像デジタルライブラリ（DiPLAS）

日本の研究者が世界各地で調査するさいに撮影した写真や動画などの画像資料は、調査当時の実態を記録した研究資源であると同時に、日本の学術史を反映する学術遺産でもあります。

この事業は、世界諸地域を対象として現在進行中の科学研究費助成事業のプロジェクトを対象に、これまでに蓄積された画像資料のデジタル化・データベース化を支援し、将来にわたる研究情報の集積と共有化の基盤を整備して提供するものです。

採択されたプロジェクトに対しては、写真・映像資料の整理、デジタル化とデータベース化を進め、さらには画像内容に関わるテキスト情報の入力の支援もおこなうことで、研究に活用できるデジタルデータのプラットフォームを作成して提供します。また、公開可能な画像については、国際的な共有化をはかり、分野の別を超えたオープンサイエンスの基盤を構築していきます。

受託研究 平成30年度

研究代表者	委託者	研究課題	研究費（千円）
野林厚志	台湾文化部	台湾および周辺島嶼地域を生態学的、文化的にとらえる	1,330
森 明子	日本学術振興会（学術動向調査）	文化人類学・民俗学関連分野に関する学術研究動向―社会人類学の新潮流	1,560
研究協力課	国際協力機構	博物館学とコミュニティ開発	6,972
			計3件　9,862

寄附金等による研究活動 平成30年度

寄附金の名称	研究代表者	寄附者	受入額（千円）
菊澤律子准教授研究助成金 りそなアジア・オセアニア財団	菊澤律子	菊澤律子	900
井家晴子外来研究員研究助成金 住友生命 未来を強くする子育てプロジェクト スミセイ女性研究者奨励賞	井家晴子	井家晴子	1,000
中田梓音外来研究員研究助成金 たばこ総合研究センター助成	中田梓音	中田梓音	850
飯塚真弓外来研究員研究助成金 住友生命 未来を強くする子育てプロジェクト スミセイ女性研究者奨励賞	飯塚真弓	飯塚真弓	920
松岡佐知外来研究員研究助成金 （公益財団法人松下幸之助記念財団研究助成）	松岡佐知	松岡佐知	300
高木仁外来研究員研究助成金 （公益社団法人日本地理学会 斎藤功研究助成）	高木 仁	高木 仁	300
井上航外来研究員研究助成金 （公益財団法人三島海雲記念財団研究助成 個人研究）	井上航	三島海雲記念財団	1,000
ピーター・J・マシウス教授研究助成金 （公益財団法人三島海雲記念財団研究助成　共同研究）	ピーター・J・マシウス	三島海雲記念財団	4,800
順益台湾原住民博物館研究賛助金	野林厚志	順益台湾原住民博物館	2,800
国立民族学博物館 活動助成金	国立民族学博物館	日本液炭株式会社	30
齋藤晃教授研究助成金	齋藤 晃	齋藤 晃	1,000
大澤由実機関研究員研究助成金 （公益財団法人ロッテ財団研究助成）	大澤由実	公益財団法人ロッテ財団	870
			計12件　14,770

手話言語学研究部門 平成30年度

手話言語学研究の推進と研究成果の諸大学や社会発信のためのアウトリーチ、および、手話手話通訳者養成を通してろう聴の研究者が協働して研究を進めるための基盤づくりにとりくむことを目的に設置されました。 現在、併任1、専任3、事務補佐員3、国内客員2、外来研究員2の計11名（うち、ろう者は4名）で手話言語学の研究、通訳養成、社会発信やアウトリーチ活動、手話を含む言語展示の企画等を進めています。

助成金の名称	助成者	助成期間	助成額（千円）
手話言語学研究部門の設置および手話言語学事業の推進	日本財団	平成30年4月～平成31年3月	37,150

文化資源関連事業・情報関連事業

文化資源プロジェクト・情報プロジェクト

「文化資源プロジェクト・情報プロジェクト」は、本館専任教員の提案に基づき、本館あるいは大学等関連諸機関が所有する学術資源の体系化および情報化をすすめ、本館専任教員のイニシアティブにより共同利用を促進し、学術的価値を高めるために、機関として実施する研究プロジェクトです。「文化資源プロジェクト」では、調査・収集分野、資料管理分野、展示分野、博物館社会連携分野の4分野のプロジェクトを実施しています。また、「情報プロジェクト」では、取材・収集分野、情報化分野の2分野のプロジェクトを実施しています。

令和元年度文化資源プロジェクト一覧

分野	提案者	プロジェクト名
調査・収集	日高真吾	北村繁作「華ひらく」の購入
調査・収集	廣瀬浩二郎	ダーウィンフィンチのタッチカービング（5体）の購入
調査・収集	卯田宗平	野生のウミウの捕獲道具一式の購入
調査・収集	河合洋尚	「客家と日本」に関する標本資料購入の選定調査
展示	山中由里子	特別展「驚異と怪異―想像界の生きものたち」展示実施
展示	笹原亮二	特別展「子ども／おもちゃの博覧会」
展示	信田敏宏	特別展「先住民の宝」
展示	寺田吉孝	企画展「旅する楽器―南アジア、弦の響き」
展示	西尾哲夫	沙漠のムスリム女性の暮らしと半世紀の変容に関する企画展
展示	鈴木 紀	企画展「メキシコのアルテ・ポプラル:暮らし・商品・声」（仮称）
展示	西尾哲夫	企画展『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年――「みられる私」より「みる私」」の巡回展
展示	池谷和信	国立民族学博物館・国立科学博物館共同企画展「ビーズ−自然をつなぐ、世界をつなぐ−」
展示	上羽陽子	国立民族学博物館コレクション「世界の衣装」
展示	廣瀬浩二郎	特別展「ユニバーサル・ミュージアム―触文化がいざなう「未開の知」への旅」（仮称）準備
展示	菊澤律子	特別展「おしゃべりするヒト」（仮称）準備
展示	小長谷有紀	企画展「梅棹忠夫生誕100年」（仮称）準備
博物館社会連携	信田敏宏	知的障害者の博物館活用モデル構築に関する実践的研究
博物館社会連携	樫永真佐夫	小・中学生用パンフレット改訂

令和元年度情報プロジェクト一覧

分野	提案者	プロジェクト名
取材・収集	川瀬 慈	エチオピア、ティグライ州の女性の門付け儀礼"アシェンダ"の映像民族誌制作
取材・収集	寺村裕史	みんぱく映像民族誌『オアシス都市の暮らし（仮題）』の制作
取材・収集	飯田 卓	みんぱく映像民族誌「王の祭り―仮面の王国・マンコン、カメルーン高地」の制作
情報化	三尾 稔	チベット宗教図像（白描画）データベース作成プロジェクト

文化資源計画事業・情報計画事業

「文化資源計画事業・情報計画事業」は、本館の共同利用基盤を整備・強化することを目的として、継続性の高い事業、または計画的に実施する事業です。

「文化資源計画事業」では、資料関連分野、展示分野、博物館社会連携分野の3分野の事業を実施しています。 また、「情報計画事業」では、記録映像制作分野、展示情報化分野の2分野の事業を実施しています。

令和元年度文化資源計画事業一覧

分野	実施責任者	事業名
資料関連	園田直子	有形文化資源の保存・管理システム構築
資料関連	日高真吾	トーテムポールの新規製作
資料関連	日高真吾	標本資料の撮影等業務
資料関連	企画課長	研究資料整理・情報化及び利用管理業務【標本資料関連】
資料関連	日高真吾	研究資料整理・情報化及び利用管理業務【データベース関連】
展示	丹羽典生	コレクション展示「日本から遠く離れて―朝枝利男の見たガラパゴス」
博物館社会連携	樫永真佐夫	ボランティア活動支援
博物館社会連携	樫永真佐夫	ワークショップの実施ならびにワークシートの運用
博物館社会連携	出口正之	音楽の祭日2019 in みんぱく
博物館社会連携	川瀬 慈	みんぱっく「エチオピア、アムハラの装い」（仮題）の制作
博物館社会連携	齋藤玲子	カムイノミ及び「アイヌ古式舞踊」演舞の実施
博物館社会連携	齋藤玲子	みんぱっくの改訂版制作（アイヌ文化にであう）

令和元年度情報計画事業一覧

分野	実施主体	事業名
展示情報化分野	飯田 卓	ビデオテーク番組「王の祭り―仮面の王国・マンコン、カメルーン高地（仮題）」の制作
展示情報化分野	齋藤玲子	「ミンバク オッタ カムイノミ」のビデオテーク用番組の制作
記録映像制作分野	情報運営会議	特別展・企画展パノラマ映像制作
記録映像制作分野	情報運営会議	研究公演記録映像制作

（全て平成31年4月1日現在）

各個研究 令和元年度各個研究課題

館長

吉田憲司	文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

人類基礎理論研究部

飯泉菜穂子	学術手話通訳者養成の実践とカリキュラムの検討および検証
川瀬 慈	コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画の研究
菊澤律子	フィジー諸言語の発達史研究における地理情報システム（GIS）の応用
相良啓子	日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明
園田直子	持続可能な資料管理に向けた収蔵庫再編成
出口正之	トランスフォーマティブな非営利研究 サイバー空間のフィールドワーク
日高真吾	地域文化の再発見とその表象システムの構築
福岡正太	映像音響メディアが伝統的音楽芸能に与える影響に関する研究
丸川雄三	連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究
山本泰則	博物館資料・情報・展示の関係性について
吉岡 乾	北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

超域フィールド科学研究部

宇田川妙子	公共性と親密性の再検討と再編
太田心平	韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性
樫永真佐夫	ベトナムにおける黒タイ文字と文書
菅瀬晶子	東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象
奈良雅史	宗教と移動に関する人類学的研究:現代中国における回族の事例から
新免光比呂	知識人亡命の二つの形態—国外のミルチャ・エリアーデと国内のコンスタンティン・ノイカ
林 勲男	災害の想起における媒体の役割—遺構・モニュメント・語り継ぎ
韓 敏	社会、歴史と象徴に関する超域フィールドの研究
MATTHEWS, Peter J.	東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証
	政治的及び地理的に隔離された少数民族独自生存圏での植物遺伝資源及び伝統知の賦存
松尾瑞穂	インドにおけるサブスタンスと人種に関する研究

人類文明誌研究部

飯田 卓	知識と情報、コミュニケーションに関する諸概念の理論的検討
池谷和信	狩猟採集民の生業に関する歴史人類学的研究
上羽陽子	現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究
卯田宗平	鵜飼文化の比較研究
小野林太郎	東南アジア海域を軸とした人類の島嶼移住と海洋適応史の解明
齋藤 晃	植民地期アンデスにおける副王トレドの総集住化の総合的研究
鈴木 紀	現代ラテンアメリカ文明の輪郭
關 雄二	古代アンデスにおける権力生成過程の研究
寺村裕史	古代シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する研究
藤本透子	カザフスタンにおける社会・宗教・伝統医療の人類学的研究

グローバル現象研究部

相島葉月	現代エジプトにおける美と身体文化
河合洋尚	ランドスケープおよびフードスケープの人類学的研究
	環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌
鈴木七美	超高齢社会のエイジングフレンドリー・コミュニティ——エイジング・イン・プレイスの重層化にむけて
鈴木英明	インド洋におけるアフリカン・ディアスポラの研究
西尾哲夫	グローバル化と中東地域の民衆文化
信田敏宏	東南アジアの文化に関する人類学的研究
	インクルーシブ社会に関する人類学的研究
平井京之介	ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究
廣瀬浩二郎	「バリア・フリー」に関する人類学的研究
三尾 稔	インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究
三島禎子	アフリカ商業民の移動と世界経済に関する歴史人類学的研究
森 明子	社会的なものの意味と通文化的普遍性に関する人類学研究

学術資源研究開発センター

伊藤敦規	日本国内博物館等所蔵アメリカ先住民資料の協働管理に向けた調査研究
大石侑香	毛皮産業近代化における人と動物の関係の変化
岸上伸啓	北アメリカ北方先住民社会におけるホッキョクジラ猟とシロイルカ猟の比較研究—獲物の分配を中心に
齋藤玲子	アイヌ文化の継承と社会的背景の研究
笹原亮二	地域の歴史文化研究における民俗誌の有効性
寺田吉孝	パフォーミング・アーツによる共生社会実現の可能性
丹羽典生	応援の人類学
野林厚志	生態資源獲得の技術の人類学的研究
南 真木人	ネパール地震から見る移動性の再検討
八木百合子	現代アンデス地域における宗教的なモノの所有と継承に関する人類学的研究
山中由里子	想像界の生きものたちに関する比較研究

研究成果の公開 ※開催場所の表記がないものは、本館で開催。外国語表記があるものは、国際研究集会。

本館では、館長リーダーシップ経費「研究成果公開プログラム」をはじめ、シンポジウムや研究フォーラム、国際研究集会への派遣など、研究成果の公開を積極的に支援しています。その他の外部資金等を含め、平成30年度は下記のような成果公開を実施しました。なお、特別研究関連については、10〜11頁に掲載しています。

学術講演会

先端的な研究活動を取りあげ、その成果を社会に積極的に還元するとともに、文化人類学・民族学を通じての異文化理解と、広く本館が学術研究機関であることの認識を一般市民に深めてもらうことを目的として、東京と大阪において学術講演会を実施しています。

みんぱく公開講演会

音楽から考える共生社会

平成30年11月2日

講師 寺田吉孝、中村美亜
司会 河合洋尚（パネルディスカッション）
会場 日経ホール
参加総数 336名
共催 日本経済新聞社

みんぱく公開講演会

アンデス文明の起源を求めて—日本人研究60年の軌跡と展望

平成31年3月22日

講師 關 雄二、坂井正人、中村誠一
司会 上羽陽子、卯田宗平
会場 毎日新聞社
オーバルホール（大阪）
聖心女子大学
ブリット記念ホール（東京）
参加総数 450名
共催 毎日新聞社

シンポジウム等

国際シンポジウム

「フィジー諸言語のGIS分析とその博物館事業への応用」

"International Symposium: Fijian Languages and Culture and GIS, and Its Application to Museum Exhibits"

平成30年9月18日〜21日

代表者 菊澤律子
経費 研究成果公開プログラム
参加者総数 30名

国際フォーラム

「地域文化を保存する—実践者の視点から」

"Preserving the Regional Cultures–Perspectives of practitioners"

平成30年12月15日〜17日

代表者 日高真吾
経費 研究成果公開プログラム
参加者総数 80名

国際シンポジウム

「ミュージアムの未来—人類学的パースペクティブ」

"Future of the Museums–An Anthropological Perspectives"

平成30年9月28日

代表者 林 勲男
経費 研究成果公開プログラム
参加者数 297名

国際シンポジウム

「歴史のロジックと構想力—世界のフィールドから」

"The Logics and Conception of History: From the Fieldworks of the World"

平成31年3月1日

代表者 韓 敏
経費 研究成果公開プログラム
参加者数 43名

国際シンポジウム

「客家エスニシティとグローバル現象」

"Hakka People and its Global Experience"

平成30年12月15日〜16日

代表者 河合洋尚
経費 研究成果公開プログラム
参加者総数 170名

公開フォーラム

「世界の博物館2018」

"Museums in the World 2018"

平成30年11月3日

代表者 菅瀬晶子
経費 JICA課題別研修「博物館とコミュニティ開発」
参加者数 56名

研究成果の出版 平成30年度

館内の出版物

国立民族学博物館研究報告

43巻1号 **論文**
「土地」を所有する現在―パナマ東部先住民エンベラから見る「境界画定」 近藤 宏
資料
みんぱく開館40周年にあたって 吉田憲司
Museums and the Anthropological Imagination: Positioning the National Museum of Ethnology, Osaka on its Fortieth Anniversary Anthony Alan Shelton

43巻2号 **論文**
アナガーリカ・ダルマパーラのブッダガヤ復興運動とインド―宗教的普遍主義からシンハラ仏教ナショナリズムへの軌跡 外川昌彦
無縁・有縁・縁を訳すコンテキスト―パプアニューギニア・トーライ社会を対象に 小坂恵敬
資料
日本における応援組織の発展と現状―四年制大学応援団のデータ分析を中心とする試論 丹羽典生

43巻3号 **Special Theme**
Nationalism in Timor-Leste
Introduction: A Nationalism of Absence Satoshi Nakagawa
The Distinctive Character of East Timorese Nationalism Michael Leach
Nationalism at Scale in Timor-Leste: Between Rai na'in and Rai Timor Andrew McWilliam
Establishing the Legitimacy of Portuguese as an Official Language in Timor-Leste Wakana Okuda
The Centre of the Land, the Periphery of the Nation: Wars and Migration in Southern Tetun Society, Timor Island Shintaro Fukutake
Reiterated Encounter: On a Reconciliation Ceremony at the Urban Settlement in Dili, Timor-Leste Toru Ueda
'Mice' of Transborder Trade in Timor Island: Timorese Smugglers and 'Reconciliations' Yoshinari Morita
論文
An Animic Regime Subjugated: The Pu Sae Ña Sae Spirit Cult in Chiang Mai Shigeharu Tanabe
研究ノート
韓国音楽学者李輔亨による湖南右道農楽録音資料の比較考察 神野知恵
資料
「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)―ニンマ派伝承の祈祷書の訳注と儀軌の記述 村上大輔

43巻4号 **論文**
カワウの人工繁殖をめぐる漁師の技法と生殖介入の動機―中国雲南省洱海における鵜飼い漁師たちの繁殖技術の事例から 卯田宗平
フェアトレードを支援する―文化人類学による研究と批判 鈴木 紀
グローバル支援の時代におけるボランティア―青年海外協力隊の「コミュニティ開発」ボランティアをめぐって 白川千尋
フィジー都市部に居住するバナバ人のエスニシティと自己認識の複相性 風間計博
減圧症リスクとダイブ・コンピューター―観光ダイビングにおける身体感覚／能力の増強とリスク認知 市野澤潤平

Senri Ethnological Studies (SES)

no. 99 *Research and Activism among the Kalahari San Today: Ideals, Challenges, and Debates,* edited by R.Fleming Puckett and Kazunobu Ikeya
no. 100 *The Spread of Food Cultures in Asia,* edited by Kazunobu Ikeya

Senri Ethnological Reports (SER)

147号 台湾原住民の姓名と身分登録 野林厚志・松岡格編
148号 カクチケル年代記 八杉佳穂著

民博通信

161号 **評論・展望**
東日本大震災以降の災害研究―人類学と他分野との協働に向けて 林 勲男
162号 **評論・展望**
水俣病を伝えるという運動―ブルデュー実践理論によるアプローチ 平井京之介
163号 **評論・展望**
イスラームの語源は「平和」か―中東地域における文化資源の現代的変容と個人空間の再世界化の研究にむけて 西尾哲夫
164号 **評論・展望**
人をつなぐ技法としてのパフォーミング・アーツ―共生のためにできること 寺田吉孝

国立民族学博物館研究年報 2017

研究年報は、本館の研究部の年次活動を総覧的に広報するために発行されています。
研究活動にとどまらず、展示や社会連携など教員がかかわるすべての年次活動を網羅的に示し、広報し、自己点検・評価書に添付する資料としての役割も加わるようになっています。

国立民族学博物館論集（館外出版）

5号 近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク 吉江貴文編
6号 再分配のエスノグラフィ―経済・統治・社会的なもの 浜田明範編

館外での出版物

聖地のポリティクス―ユーラシア地域大国の比較から
杉本良男・松尾瑞穂編 風響社
資源化される「歴史」―中国南部諸民族の分析から
長谷川清・河合洋尚編 風響社
家族・民族・国家―東アジアの人類学的アプローチ 韓 敏編 風響社

学術資源研究開発センター

センターの設置目的

学術資源研究開発センターは、本館が所蔵する学術資源の学際的かつ国際的共同利用性を高度化することを目的として、平成29年4月1日に設置されました。

学術資源研究の開発

国立民族学博物館には、約34万点の標本資料や約7万点の映像・音響資料、約67万冊の書籍、本館の所蔵資料をはじめ、多様な研究資料や写真資料、研究成果に関連するデータベース、文化人類学者・民族学者が残したフィールドノートや調査資料からなる民族学研究アーカイブズ等があります。これらは人類の文化や活動に関わる文化資源であり、人類の過去、現在、そして未来を考えるための貴重な学術資源でもあります。本館では、これらの学術資源に関する研究成果や情報を「フォーラム型情報ミュージアム」とよばれるデータベースや、特別展・企画展・巡回展など多様な媒体を利用して公開するなど、学術資源の共同利用性を学際的かつ国際的に高めるプロジェクトを実施しています。本センターでは、これらの研究プロジェクトを支援するとともに、新たに立案し、推進します。

平成30年度成果

平成30年度には、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアム構築」プロジェクトの開発型プロジェクト4件と強化型プロジェクト5件の推進を支援するとともに、国際シンポジウム「ミュージアムの未来―人類学的パースペクティブ」を企画しました。また、特別展「太陽の塔からみんぱくへ―70年万博収集資料」、「工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」、「子ども／おもちゃの博覧会」や企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて―そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」、「旅する楽器―南アジア・弦の響き」、巡回展「ビーズ―つなぐ・かざる・みせる」、「工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」、共催展示「国立民族学博物館コレクション　貝の道」などの準備と開催を支援しました。また、学術資源の共同利用性の高度化のための研究を実施しました。

令和元年度事業

令和元年度には、おもに3つの事業を展開します。

フォーラム型情報ミュージアム構築プロジェクトの研究推進と支援

本館では、平成28年度より人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクト「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を実施しています。令和元年度には、「アイヌ資料」や「中央・北アジア資料」など4件の開発型プロジェクトと「中南米資料」や「オセアニア資料」など6件の強化型プロジェクトを実施します。本センターでは、標本資料名の統一化・多言語化などについて研究するとともに、データベースの構築や編集、発信などに関して各プロジェクトの推進を支援します。

特別展・企画展・巡回展プロジェクトの研究推進と支援

本館では、学術資源やそれらに関連する研究成果を公開するために、特別展や企画展、巡回展を実施しています。令和元年度には、特別展「子ども／おもちゃの博覧会」、「驚異と怪異―想像界の生きものたち」、「先住民の宝」(仮称)や企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年―「みられる私」より「みる私」」、「アルテ・ポブラル―メキシコの造形表現のいま」、コレクション展示「日本から遠く離れて―朝枝利男の見たガラパゴス」(仮称)などを実施します。本センターでは、これらの展示をおこなうための研究を進めるとともに、実施するための支援をおこないます。

学術資源の共同利用性の高度化に関する研究

令和元年度には、いかにすれば本館の学術資源の学際的・国際的な共同利用化が進展し、大学教育や学術研究、知識の一般社会への普及、文化の担い手による文化の創成等に効果的に貢献できるかについて研究します。

国際研究統括室

設置目的

国際研究統括室は、各研究部ならびにセンターによる組織的研究力を強化し、共同利用・共同研究の面での機能強化を図るために、旧研究戦略センターと旧国際学術交流室が担ってきた国内および海外との共同研究・共同利用に係る研究戦略機能を統合的に引き継ぎ、新領域の開拓のための共同利用型研究体制の基盤整備及び国際・国内戦略を立案し統括することを目的として、平成29年4月に設置されました。 具体的には、共同利用型研究プロジェクトの実施体制の改善、学術交流協定（国内外）締結方針の策定と締結、海外研究動向調査、外部資金に関する情報収集と情報提供など、本館がより戦略的かつ組織的に国際的な研究連携や共同研究を推進していくために必要な活動をおこなっています。

海外の研究機関との研究連携、研究協力の推進

研究連携や研究協力のために、海外の研究機関との学術協定について、
調査・締結を進めています。
平成30年度は、8月にザンビア国立博物館機構との間で学術協定を締結しました。

ザンビア国立博物館機構との協定調印式

協定先機関名	協定締結日	協定の概要および平成30年度活動概要
国立博物館機構（ザンビア）	平成30年8月12日	国際共同研究、研究者の交流、博物館に関する資料や情報の交換など。 30年度に、両博物館における研究活動や博物館活動を促進・活性化させることを目的に協定が結ばれた。
イラン国立博物館（イラン・イスラム共和国）	平成29年12月16日	国際共同研究、研究者の交流、博物館に関する資料や情報交換など。 30年度は、フォーラム型データベースと連携し、本館所蔵イラン関連収集品に関する意見交換及び、研究交流を促進するためにイラン国立博物館で国際シンポジウムを開催した。
客家文化発展センターおよび交通大学客家文化学院（台湾）	平成29年11月8日	国際共同研究、研究者の交流、博物館に関する資料や情報交換など。 30年度には、12月14日に講演会「台湾客家と日本客家」、15日～16日にかけて国際シンポジウム「客家エスニシティとグローバル現象－華僑華人の拡がりと現在」を民博で開催し、来年度に台湾で開催する国際シンポジウムの立案に参与した。
ブリティッシュコロンビア大学 人類学博物館―UBC―（カナダ）	平成29年3月9日	研究交流、人材交流、データベース構築の協力など。 30年度に同博物館館長・研究者と連携し、フォーラム型情報ミュージアム「北米北方先住民連文化資源データベース」の高度化を行った。トータムポール製作について情報収集及び異文化展示のあり方、カナダの博物館ネットワークについて共同研究をした。
浙江大学人類学研究所・図書館（中国）	平成28年4月19日	資料の寄贈、人材交流、共同研究など。 30年度には、吉田館長、韓教授、河合准教授が浙江大学へ赴き「民博文庫」の視察、意見交換を行うと同時に、同大学において学術交流も行った。
ヴァンダービルト大学（米国）	平成28年1月15日	国際共同研究、国際シンポジウムの開催など。 30年度は、スペインで開催された第56回国際アメリカニスト会議で研究成果を発表したほか、本館では「トレドのレドックシオンの歴史考古学における進展と進展棒」と題する公開講演会を開催した。
国立台湾歴史博物館（台湾）	平成27年10月17日	共同研究、博物館展示協力など。 30年度には、博物館専門人材育成を目的とした国際フォーラム「地域文化を保存する－実践者の視点から」を国立台北芸術大学と民博と共同で運営し、台湾高雄市で開催した。
北アリゾナ博物館（米国）	平成26年7月4日	学術交流・研究の強化・発展。 30年度は、本館で開催された国際シンポジウム「ミュージアムの未来-人類学的パースペクティブ」を初めとする国際シンポジウムでの研究成果発表のほか、『天理大学附属天理参考館収蔵24点の「ホピ製」資料熟覧-ソースコミュニティと博物館資料との「再会」2』の執筆を行った。
中国社会科学院民族学・人類学研究所（中国）	平成24年8月28日	学術交流ならびに研究プロジェクトや研究資料、学術情報及び公開出版物の交換と相互利用の展開など。 30年度は、これまでに実施した国際シンポジウムの成果を論文集にまとめ、多言語による研究成果の発信と論文集の刊行出版を行った。
国立博物館（フィリピン）	平成24年7月18日	共同研究、研修、出版、展示等のプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進など。 30年度は、フィリピンでの植物サンプルの収集調査について意見交換を行った。
アシウィ・アワン博物館・遺産センター（米国）	平成24年6月3日	学術協力、共同研究のプロジェクトの展開、博物館資料の展覧および教育分野における協力活動など。 30年度は、本館で開催された国際シンポジウム「ミュージアムの未来-人類学的パースペクティブ」を初めとする国際シンポジウムでの研究成果発表のほか、『天理大学附属天理参考館収蔵24点の「ホピ製」資料熟覧-ソースコミュニティと博物館資料との「再会」2』の執筆を行った。
ベトナム生態学生物資源研究所（ベトナム）	平成24年3月22日	共同研究、研修、出版、展示等のプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進など。 30年度は、中央ベトナムでの植物サンプルの収集調査を実施した。
ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学 民族学博物館（クンストカメラ）（ロシア）	平成23年10月21日	学術・文化の両分野における相互交流および協力関係を発展など。 30年度は、リニューアルした本館の中央・北アジア展示に関して意見交換を行った。
ロシア民族学博物館（ロシア）	平成22年12月3日	博物館学、調査研究、文化財保護の各分野における協力と相互支援の促進など。 30年度は、中央・北アジアの諸民族資料に関するSESおよびSER刊行へ向けて編集作業を行った。また、ロシア民族学博物館との協力の下でリニューアルした本館の中央・北アジア展示に関して意見交換を行った。
エジンバラ大学（英国）	平成22年5月17日	学術交流ならびに共同的な研究事業の促進など。 30年度には、「現代インド地域研究」プロジェクトと同大学が協力し、英文研究叢書 the New Horizons on Contemporary South Asia seriesの編集作業を継続した。
国立台北芸術大学（台湾）	平成21年5月15日	相互の学術交流、研究プロジェクトの展開、博物館展示・教育活動に関する協力、学術情報・出版物の交換など。 30年度は、フィールドワークを実施したほか、地域文化の保存をテーマとした国際フォーラムを高尾市立歴史博物館で開催した。
内蒙古大学（中国）	平成20年9月22日	教職員・研究者の交流、研究プロジェクトの展開、博物館展示品の展覧及び教育分野における協力活動、学術研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の展開など。 30年度は、協定先を訪問し、集中講義を行った。 また、相手方機関から研究者を受入れ、資料収集における協力活動を行った。
韓国国立民俗博物館（韓国）	平成19年7月11日	研究者交流、共同研究、研究集会の実施、博物館展示・教育活動に関する協力、学術情報・出版物の交換など。 30年度は、協定更新にかかる研究計画設計を行い、本館のフォーラム型ミュージアムプロジェクトにおける研究協力について、意見交換を行った。
順益台湾原住民博物館（台湾）	平成18年7月1日	共同研究、博物館展示協力など。 30年度には、2回の研究会を開催し、『台湾原住民研究』第22号、『台湾原住民の姓名と身分登録』（国立民族学博物館調査報告147号）の編集を行った。
国立サン・マルコス大学（ペルー）	平成17年6月14日	考古学分野における共同研究員調査の遂行、ならびにそれに基づく学術交流を促進。 30年度は、パコパンパ遺跡の発掘調査を行うとともに、本館で開催された国際シンポジウム「アンデス文明形成過程をめぐる新たな視角:編年、交流、社会組織」を含む各地の国際シンポジウムで研究発表を行った。

みんぱくフェローズ

これまで本館と関わりのあった海外の研究者、および本館と関連の深い国内外の研究機関を「みんぱくフェローズ」として位置づけ、そのネットワークを構築しています。
ネットワーク内の情報交換の手段として、英文のニューズレター（MINPAKU Anthropology Newsletter）を年2回発行し、交流を促進しています。「みんぱくフェローズ」として約1,200件が登録されています。

MINPAKU Anthropology Newsletter

フェローズ地域別一覧　平成31年3月31日現在

地域	
アジア・中東・オセアニア	676
ヨーロッパ	174
北米・中南米	216
アフリカ	70
合計	1,136

国内の研究機関等との研究連携、協力の推進

国内の大学等の研究機関や学会とも研究連携や協力、共同研究等の推進のため、学術協定を締結しています。平成30年度は、11月に一般社団法人文化財保存修復学会、日本展示学会との間で協定を締結しました。

協定先機関名	協定締結日	協定の概要
日本展示学会	平成30年11月26日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
一般社団法人文化財保存修復学会	平成30年11月19日	文化財の保存に関わる科学・技術の発展と普及。
京都造形芸術大学	平成30年3月19日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
大阪大学	平成30年3月17日	学術研究、教育、社会貢献及びその他諸活動の発展への寄与。
山形大学	平成30年2月16日	学術研究、教育及び社会の発展に貢献。
大妻女子大学	平成29年6月20日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
神戸大学大学院人文学研究科	平成28年7月15日	研究教育のための学術交流。
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	平成27年11月25日	世界諸地域の言語と文化に関する学術研究、連携協力。
株式会社海遊館	平成27年11月19日	産学連携の推進、学術研究の振興、研究成果による社会貢献、連携協力。
大阪工業大学	平成27年3月23日	情報メディア・ディジタルコンテンツに関する学術研究、連携協力。
立命館大学	平成26年4月10日	食に関する学術研究、連携協力。
金沢大学	平成26年3月23日	両機関間の連携・協力の実績を基盤に、緊密かつ組織的な体制強化。
日本文化人類学会	平成20年2月27日	研究連携、研究交流、相互の研究成果の活用の促進。 人類社会における学術の発展と普及への寄与。

博物館の共同利用

大学生・教員のためのみんぱく活用

研究の成果、展示物や所蔵資料、文化・学術情報、施設などを大学の教育と研究にひろく活用していただくための制度を設けています。

展示場の利用

教員同伴のもと、大学の講義・セミナーおよび公式行事（例:新入生オリエンテーション等）で展示場を利用する場合、事前申請をすると観覧料が無料となります。
見学に教員が同行しない場合、または専門学校及び専修学校（専門課程に限る）の授業で見学する場合、シラバス等、授業内容が明記された資料を提示すると、割引料金で観覧できます。

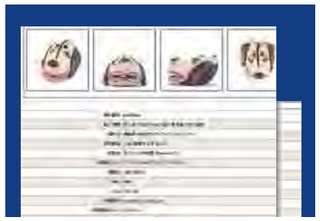
展示場の利用

図書室の利用

文化人類学・民族学を中心とした文献図書資料が約67万点。
大学の授業等での図書室見学も受けつけています。

標本資料の利用

世界中から収集した標本資料が約34万点以上。
大学における教育や研究目的で利用する場合、利用料は無料です。


データベースの利用

映像・音響資料の利用

みんぱくが制作したものなど、世界各地の映像・音響資料が約7万点。
約805番組あるビデオテークはDVDで視聴できます。

データベースの利用

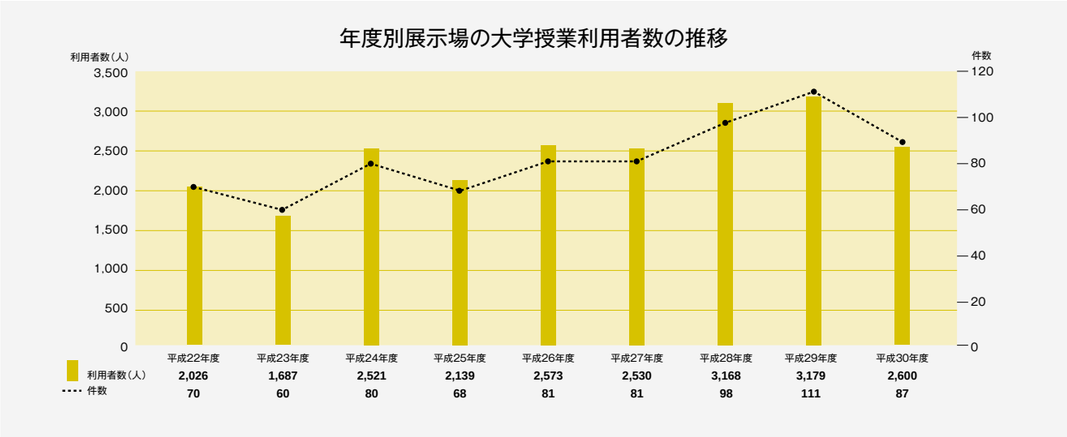
所蔵資料や、研究資料・成果の膨大な情報が自由に検索できます。

若手研究者の育成

若手研究者による本館における共同利用を促進するため、「みんぱく若手研究者奨励セミナー」を開催しています。セミナーでは、本館教員による基調講演のほか、参加者による発表と討論を2日間の日程でおこないます。また、若手を対象とした各種共同利用制度や施設紹介の一環として図書館や収蔵庫見学も実施します。

みんぱく若手研究者奨励セミナー

平成30年度利用実績　87件2,600名（無料利用）



大学・短大等からの団体入館者件数
愛知淑徳大学（59）、追手門学院大学（136）、大阪大谷大学（73）、大阪学院大学（59）、大阪教育大学（93）、大阪産業大学（90）、大阪大学（78）、金沢星稜大学（56）、京都精華大学（116）、京都造形芸術大学（69）、京都橘大学（58）、甲南大学（174）、神戸女学院大学（57）、神戸女子大学（88）、就実大学（54）、東北学院大学（94）、名古屋学芸大学（81）、梅花女子大学（52）、龍谷大学（101）
（以上、国内1団体50人以上）などから、103団体3,058人

共同利用型科学分析室

設置目的

本館は、民族資料や文化財、博物館資料を対象に、一次的な非破壊分析や材質分析がおこなえる非破壊分析・材質分析装置システムを所有しています。 共同利用型科学分析室は、非破壊分析・材質分析装置システムを文化人類学やその周辺領域の学問分野において、さまざまな組織や研究者がより積極的に活用でき、科学的研究に基づいた共同利用の促進に資することを目的として、平成29年12月に設置されました。

所有機器

X線透視CTスキャン装置
三次元積層造型機（3Dプリンター）
三次元形状計測装置
熱分解ガスクロマトグラフ
イオンクロマトグラフ
蛍光X線分析装置
恒温恒湿槽
フーリエ変換赤外分光光度計（FT-IR）
デジタルマイクロスコープ

利用について

非破壊分析・材質分析装置システムの利用については、企画課標本資料係で受けつけています。

企画課標本資料係
TEL　06-6878-8392
FAX　06-6878-8242
Mail　hyohons@minpaku.ac.jp

X線透視CTスキャン装置

三次元積層造型機（3Dプリンター）

恒温恒湿槽

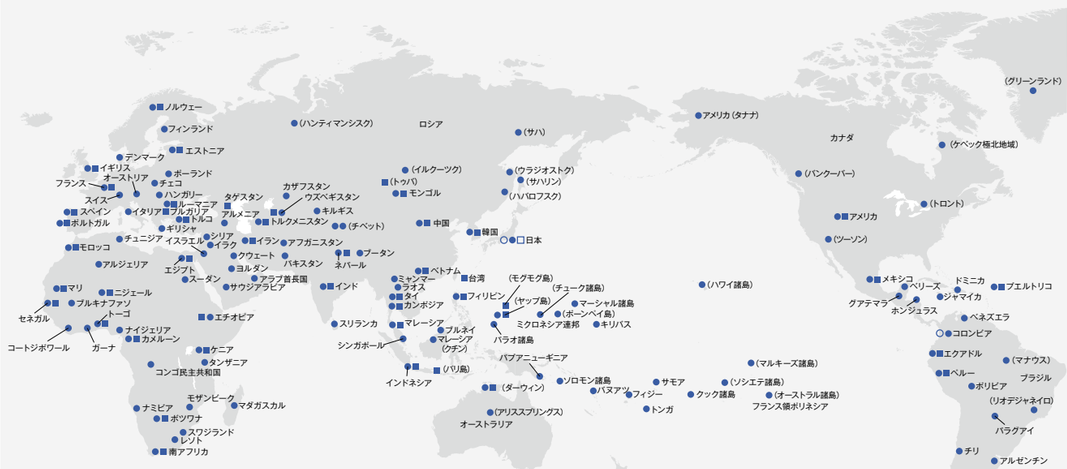
蛍光X線分析装置

資料・情報の整備と社会還元

本館では、文化人類学・民族学を核とする諸分野の資料や情報を集積・整備して国内外研究者の共同利用に供するとともに、展示や各種事業などを通じて研究成果の社会還元をおこなっています。 そのために、資料の収集、管理、情報整備、データベースとコンテンツの制作、展示、各種事業への展開の方法についても研究を重ねています。
情報管理施設は、これらの活動を支援するために設けられた附属施設です。

資料とデータベース

標本資料収集および映像取材地域



諸資料の所蔵一覧 平成31年3月31日現在

標本資料（未登録資料含む）	344,965点
海外資料	179,127点
国内資料	165,838点

映像・音響資料	70,850点
映像資料	8,223点
音響資料	62,651点

文献図書資料	
図書（製本雑誌含む）	678,270冊
日本語資料	266,112冊
外国語資料	412,158冊
雑誌	17,171種
日本語雑誌	10,143種
外国語雑誌	7,028種

HRAF Human Relations Area Files

地域（民族集団）ファイル	385ファイル
原典（テキスト）	7,141冊

※現在はwebデータベースとして提供
eHRAF World Cultures
地域（民族集団）ファイル： 452ファイル　原典（テキスト）：5,979点　739,121頁
eHRAF Archaeology（先史時代など考古学的な文献データベース）
地域（民族集団）ファイル： 102ファイル　原典（テキスト）：2,491点　153,383頁
（平成30年6月現在）

データベース一覧 平成31年3月31日現在

本館の所蔵資料をはじめ、さまざまな研究資料や研究成果をデータベース化し、館内外に広く提供しています。
（＊印は、館内でのみ利用できるデータベース。 各データベースの〔 〕内の数値は収録レコード数。）

標本資料

標本資料目録
本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。 ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。 〔286,297件〕

標本資料詳細情報
本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。 標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。
〔館内公開：277,624件（内インターネット公開：73,393件）〕

標本資料記事索引
本館関連出版物に掲載された所蔵標本資料の解説について、その書誌事項を標本資料別に整理したデーターベース。 〔67,426件〕

韓国生活財
ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。 アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像あり）。 〔7,827件〕

ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版、英語版）
宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀末から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像あり）。 〔2,992件〕

カナダ先住民版画 ＊
本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像あり）。 特別展「自然のこえ 命のかたち―カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。 〔158件〕

映像・音響資料

映像資料目録
本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVDなど映像資料の情報。 〔8,223件〕

ビデオテーク
本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。 番組をキーワードで検索したり、ビデオテークブースと同じメニューから探すことができる。 〔775件〕

音楽・芸能の映像
本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。 映像は館内限定公開。 〔849件〕

松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション
松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像あり）。 〔170件〕

京都大学学術調査隊写真コレクション
「京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。
〔館内公開：42,195件（内インターネット公開：22,361件）〕

梅棹忠夫写真コレクション ＊
梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像あり）。 〔35,481件〕

オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真 ＊
小山修三本館名誉教授が、1980年から2004年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報（画像あり）。 〔7,999件〕

朝枝利男コレクション ＊
朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像あり）。 〔3,966件〕

西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料―大島襄二写真コレクション
大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。 〔館内公開：8,842件（内インターネット公開： 7,889件）〕

アフリカ カメルーン民族誌写真集―端信行コレクション
端信行本館名誉教授が1969年から90年代初頭にかけて行った、おもにアフリカのカメルーン共和国での民族学的調査の中で撮影した写真の情報（画像あり）。 〔6,530件〕

沖守弘インド写真（日本語版、英語版）
写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり）。
〔館内公開：22,120件（内インターネット公開：21,971件）〕

ネパール写真（日本語版、英語版）
「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像あり）。 〔3,879件〕

西北ネパール及びマナスル写真 ＊
「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像あり）。 一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班の写真（推定）を含む。 本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。 〔620件〕

タイ民族誌映像―精霊ダンス ＊
田辺繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像あり）。 精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。 写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。
〔写真：10,082件　調査報告：41件〕

東南アジア稲作民族文化綜合調査団写真 ＊
日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像あり）。 〔4,393件〕

焼畑の世界―佐々木高明のまなざし ＊
佐々木高明（本館元館長）が調査で撮影・記録した写真の中から、特に日本の焼畑に関するものを収録（画像あり）。 〔454件〕

音響資料目録
本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。 〔62,651件〕

音響資料曲目
本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一話単位で収録した情報。 〔351,802件〕

文献図書資料

図書・雑誌目録（OPAC）
本館が所蔵する図書・雑誌資料（マイクロフィルムなどを含む）の書誌・所蔵情報。
〔図書資料：630,174件　雑誌タイトル：17,170件〕

梅棹忠夫著作目録（1934～）
著書・論文をはじめ本の帯の推薦文にいたるまで、梅棹忠夫本館初代館長のあらゆる著作を網羅した目録情報。 〔6,725件〕

言語資料

中西コレクション―世界の文字資料
世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。 これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。

吉川「シュメール語辞書」
吉川守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。 親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。 〔キーワード：33,450語（40,596頁）〕

Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok（ボントック語音声画像辞書）
Lawrence A. Reid氏（ハワイ大学名誉教授）が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナアン方言の辞書。 語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。 〔見出し語：7,717語〕

日本昔話資料―稲田浩二コレクション
稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。 音声は館内限定公開。 〔3,696件〕

rGyalrongic Languages（ギャロン系諸語）［英語、中国語］
長野泰彦本館名誉教授とMarielle Prins博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース（音声あり）。 83の方言ないし言語それぞれについて、425または1200の語彙項目と200の文例を収録している。 〔語彙：41,078語　文例：15,706件〕

服装・身装文化資料

衣服・アクセサリー
本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリー標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報（画像あり）。 〔31,430件〕

身装文献
身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1）服装関連日本語雑誌記事（カレント）、2）服装関連日本語雑誌記事（戦前編）、3）服装関連外国語雑誌記事、4）服装関連日本語図書、5）服装関連外国語民族誌で構成。 〔179,794件〕

近代日本の身装電子年表
洋装がまだ日常に定着していなかった1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。 当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。 〔11,905件〕

身装画像―近代日本の身装文化
和装と洋装が拮抗していた1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）までの日本を対象とした身装関連の画像データベース。 当時の新聞小説挿絵、写真、図書中の図版、ポスターなどから画像を収録。 〔6,740件〕

ファクト、他

国内資料調査報告集 ＊
日本国内における、1）民具などの標本資料類の所在、2）伝統技術伝承者の所在、3）民族・民俗映像記録の所在、4）民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。 本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。 〔21,373件〕

3次元CGで見せる建築―東南アジア島嶼部の木造民家
佐藤浩司本館准教授が1981年以来調査してきた東南アジア各地の木造建築物の情報。 民家の3次元CGから作成したgifアニメーションにより建築物内外を巡回して見ることができる。 〔36地点　57棟〕

津波の記憶を刻む文化遺産―寺社・石碑データベース
日本の沿岸部に残されている、地震や津波災害の記憶を伝える寺社や石碑、銘板などの情報（画像あり）。 〔378件〕

みんぱく図書室の活動

利用案内

開室日時　月･火、木曜日～土曜日　10:00～17:00（入室は16:30まで）
休室日　日曜日、祝日、水曜日、博物館休館日および年末年始（12月28日～1月4日）
利用資格　どなたでもご利用できます。貸出には、図書室利用証が必要です。（要登録）
資料によっては利用できない場合があります。事前にお問合せください。
Webサイト　http://www.minpaku.ac.jp/research/sharing/library

1. 教育･研究支援

本館が所蔵する文献図書資料は、専門性の高い蔵書構成となっています。マイクロフィルムリーダーを4台設置し、カラーコピー機での複写サービスもおこなっています。カウンターには司書資格を有するスタッフが常駐し、大学共同利用機関として、教育･研究活動の支援体制を整えています。

図書室カウンター

2. 文献図書資料の国立情報学研究所を介した目録情報公開を促進

平成30年度は世界42言語の図書を目録登録し、630,483冊が検索可能となりました。また、NACSIS-CAT（全国規模の総合目録データベース）への遡及入力事業として、マイクロ資料3,508件（北米学位論文約1,005件、図書2,127件、新聞雑誌8タイトル 376件）を登録しました。97%が入力済みとなりました。

3. 社会貢献など

一般利用者も館外貸出利用ができます。平成30年度の一般利用者の登録者数は189名、館外貸出冊数は1,633冊です。

4. 蔵書検索

本館が所蔵する文献図書資料は、インターネット環境があればパソコンや携帯電話を使って、どこからでも検索することができます。平成30年度の館外からの検索回数は、パソコン549,263回、携帯電話で175,903回ありまでした。

雑誌コーナー

学術情報リポジトリ

「みんぱくリポジトリ」は、NII（国立情報学研究所）のJAIRO Cloud（共用リポジトリサービス）を利用して、館内出版物『Senri Ethnological Studies』、『国立民族学博物館調査報告（Senri Ethnological Reports）』、『国立民族学博物館研究報告』、『国立民族学博物館研究報告別冊』、『民博通信』等に加えて、外部で出版されたもののうち、利用許諾が取得できた論文を随時公開しています。その数は、平成30年度末時点で約4,765コンテンツで、論文のダウンロード利用数は月平均約70,016件です。平成30年度は、論文情報に「タイトル」、「著者名」等に英語表記を追加する遡及作業が完了し、『国立民族学博物館調査報告（Senri Ethnological Reports）』掲載の論文が英語でも検索できるようになりました。

民族学研究アーカイブズの構築

梅棹資料室

本館では創設以来、文化人類学･民族学研究者の研究ノートや原稿、フィールドで作成した映像･録音記録などさまざまな資料を集積してきました。これらを活用すべく情報運営会議の下に設置された「アーカイブズ部会」により、平成30年度も継続してアーカイブズ資料の実態調査と目録作成及びデジタル化をおこないました。今後も作業を継続し、順次公開していくことを目指します。また、初代館長梅棹忠夫の残した、フィールドノート、スケッチ、写真、メモ、原稿、著作、書評など、知的生産の素材とそこから生産された多種多様かつ膨大なアーカイブズ資料を整備・保管する収蔵施設として、平成25年4月に「梅棹資料室」を設置しました。専属担当者（アーキビスト）が資料を分析・整理し、主に学術研究等に活用するための支援をおこなっています。

保存箱に収納されたアーカイブズ資料

- ●青木文教（あおき ぶんきょう）アーカイブ
- ●泉 靖一（いずみ せいいち）アーカイブ
- ●岩本公夫（いわもと きみお）アーカイブ
- ●内田勣（うちだ いさお）･1930年代台湾および日本を中心とした東アジア文化アーカイブ
- ●梅棹忠夫（うめさお ただお）アーカイブズ
- ●江口一久（えぐち　かずひさ）･アフリカ･アジアの言語アーカイブ
- ●大内青琥（おおうち せいこ）アーカイブ
- ●沖 守弘（おき もりひろ）･インド民族文化資料アーカイブ
- ●桂米之助（かつら よねのすけ）アーカイブ
- ●鹿野忠雄（かの ただお）アーカイブ
- ●菊沢季生（きくざわ すえお）アーカイブ
- ●栗田靖之･別府春海（くりたやすゆき･べふはるみ）･日本人の贈答アーカイブ
- ●小林保祥（こばやし やすよし）･台湾南部原住民族アーカイブ
- ●篠田統（しのだ おさむ）アーカイブ
- ●杉浦健一（すぎうら けんいち）アーカイブ
- ●土方久功（ひじかた ひさかつ）アーカイブ
- ●馬淵東一（まぶち とういち）アーカイブ
- ●丸谷彰（まるたに あきら）･朽木村針畑生活資料アーカイブ
- ●「日本文化の地域類型研究会」アーカイブ

諸資料の利用 平成30年度

本館の所蔵する民族学資料は、館内外における諸分野の研究や大学教育、他の博物館への貸付などを通し、社会還元されています。
民族学資料の利用に関するお問い合わせは、「民族学資料共同利用窓口」で受け付けています。
平成30年度受付件数は、278件でした。

民族学資料共同利用窓口
TEL･FAX　06-6878-8213
URL　http://www.minpaku.ac.jp/research/sharing/helpdesk

1. 標本資料の貸付件数　18件　貸付資料数　621点

上記のうち、展覧会の展示点数全体における本館資料の貸付件数の占める割合が50パーセントを超えるものは、下記のとおりです。

貸付先	展覧会名	貸付資料	展覧会期間	貸付点数／全体の展示点数･貸付資料が展示資料に占める割合
神奈川県立近代美術館	「国立民族学博物館コレクション　貝の道」	首飾りなど	平成30年6月23日～9月2日	153点/170点（90%）
岡山市立オリエント美術館	平成30年度特別巡回展 ビーズ−つなぐ、かざる、みせる−“BEADS IN THE WORLD”	ビーズ資料	平成30年9月22日～11月28日	244点/380点（64%）

2. 標本資料の特別利用（原板使用･写真撮影･熟覧）件数 91件 1,874点

上記のうち、大学関係23件（調査研究、著作の参考資料としての写真利用など）、博物館関係25件（調査研究、展示に係る写真利用など）

3. 映像･音響資料の利用件数 132件　貸出点数 5,687点

上記のうち、大学関係47件 417点、研究用（個人・研究会など）49件 4,925点

4. 文献図書資料

文献複写受付 3,494件（うち大学などの機関 2,273件）文献複写依頼 274件
現物貸借受付 485件（うち大学などの機関 416件）現物貸借依頼 452件
特別利用（原板使用･写真撮影）4件（うち調査研究、著作への写真使用など4件）

標本資料収蔵庫

5. 研究アーカイブズ資料

閲覧件数 23件　特別利用 1件　貸付 1件

資料の保存

本館では、研究や展示などに使用する各種の学術資料を収集しています。資料の大半をしめる標本資料には、虫やカビの害を受けやすい有機素材が多く使われているため、資料の防虫･殺虫対策には特別な注意を払っています。たとえば海外からの新着資料には、収集地と日本の自然環境や生態系が大きく異なるため、燻蒸庫で薬剤による殺虫･殺菌処理をおこなっています。一方、日本国内に入ってから加害された資料には、できるかぎり薬剤を用いない殺虫処理法をおこなうなど、収集地や加害環境、材質の違いを考慮に入れながら殺虫処理法を使い分けています。このような本館特有の防虫･殺虫対策を有効に実施するため、平成19年に、大型のウォーク･イン高低温処理庫を新設するとともに、既存の燻蒸庫を、二酸化炭素処理や低酸素濃度処理もおこなえる多機能燻蒸庫に改修しました。また、燻蒸使用後の薬剤処理を目的に、触媒燃焼式の除害装置を設置することで、「ひとに、ものに、自然にやさしい」資料管理を実現しています。これらのシステムは、本館が、他大学などの研究者とともに資料の有効活用を支えるためにおこなっている保存科学研究の成果のひとつでもあります。

ウォーク･イン高低温処理庫

二酸化炭素処理や低酸素濃度処理もおこなえる多機能燻蒸庫

展示

展示の理念と構成

みんぱくにおける展示は、文化人類学・民族学とその関連諸分野の研究成果を多様なメディアを通じて社会に公開し、世界各地の文化についての認識を深めるとともに、文化の違いを超えた相互理解の場を提供することを目的としています。 展示は、本館展示と特別展示・企画展示で構成されます。 本館展示では、世界の文化の多様性と共通性についての広い理解が得られるよう、常設的な展示をおこなっています。 一方、特別展示・企画展示は、特定のテーマについて深く掘り下げた内容の展示を、期間を限って、年に数回開催するものです。

本館展示

本館展示は、地域展示と通文化展示から構成されています。

地域展示では、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地域に分け、オセアニアを出発して東回りに世界を一周し、最後に日本にたどり着く構成をとっています。 日本の文化を世界各地の文化との関連の中で理解できるように配慮したものです。 みんぱくでは、創設以来、世界の民族文化に優劣はなく、すべて等しい価値をもつという認識にもとづいて、展示をつくり上げてきました。 それぞれの文化に見られる違いは、人類の営みの豊かな多様性を示すものとして展示されています。 また、世界の人びとの暮らしがよくわかるように、衣食住などの生活用品を中心とした展示になっているのも特徴のひとつです。

一方、通文化展示とは、地域単位でなく、特定のジャンルを取り上げて広く世界の民族文化を通覧する展示で、現在は音楽と言語についての展示を常設しています。

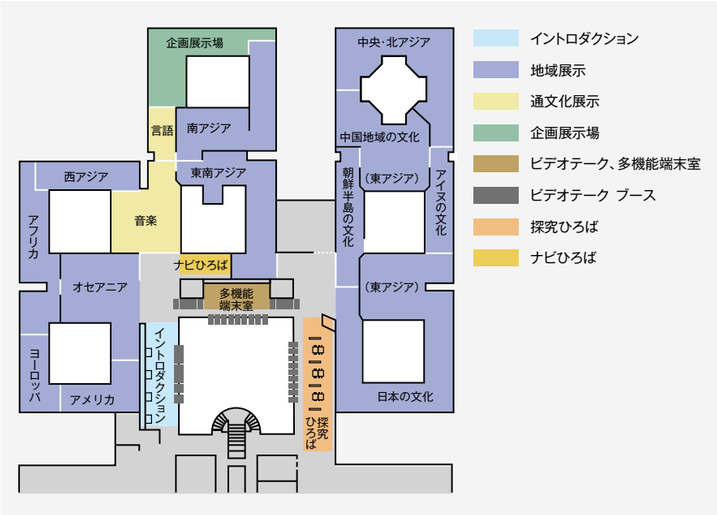
本館展示は、1977年の開館以来40年が経ち、世界の社会・文化的状況や学問のありかたなどが大きく変化していることにともない、平成20年度から展示の新構築を進めました。

その基本的な考え方は、以下の5点に要約できます。 1. 国内外の研究者の力を結集する大学共同利用機能の活用。 2. 展示に関わる三者、つまり展示をつくる研究者と展示の対象となる文化の担い手、そして展示の利用者が相互に交流・啓発して文化の違いを超えたフォーラムとしての展示の展開。 3. 地域と世界や日本とのつながりとともに、文化が接触して変化する動態も示すグローカル展示への刷新。 4. 情報提供の高度化や深化。 5. 利用者の多様な要求にこたえる展示の実現。

平成21年3月にはアフリカ展示と西アジア展示、22年3月には通文化展示の音楽展示、言語展示と共同利用展示場、インフォメーション・ゾーンの一部（ナビひろば）、23年3月にはオセアニア展示とアメリカ展示、24年3月にはヨーロッパ展示とインフォメーション・ゾーン、25年3月には日本の文化展示のうち「祭りと芸能」「日々のくらし」、26年3月には朝鮮半島の文化展示、中国地域の文化展示、日本の文化展示のうち「沖縄のくらし」「多みんぞくニホン」、27年3月には南アジア展示、東南アジア展示、28年6月には中央・北アジア展示、アイヌの文化展示が生まれ変わりました。 本館展示場内に設けている企画展示場では、期間を限って、現代的な問題や最先端の研究成果など個別のテーマを取り上げた展示をおこなっています。 この企画展示場は、国内外の大学等の最新の研究動向を迅速に展示に結びつける、共同利用展示場としても活用しています。

みんぱくでは、情報機器を活用した展示を積極的に展開しています。 ビデオテークは、「映像情報自動送出装置」として、みんぱくが世界に先がけて開発したものです。 約805本の映像番組を自分で選択して視聴することができます。 その映像を通じて、本館展示場内で紹介されている民族の生活や、その民族が生み出したモノが実際に用いられている様子を確認することができます。 一方、世界ではじめての映像と音声による携帯型の展示解説装置「みんぱく電子ガイド」は、平成19年度に新しいシステムに更新され、軽量化とともに、利便性が大幅に向上しました。

また、探究ひろばでは、情報検索端末を用いて展示資料に関するさまざまな情報を検索したり、比較したりすることができ、関連する書籍やみんぱくの刊行物を閲覧することもできます。



みんぱく電子ガイド

展示資料が、どのような場所で、どのような人びとによって、どのように使われているかを、映像と音声を使って解説する携帯型の展示解説装置です。 日本語版、英語版、中国語版、韓国語版を用意しています。（平成30年度貸出件数: 6,713件）

地域展示

地域展示では、世界を大きくオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、南アジア、東南アジア、中央・北アジア、東アジアの9地域に分けています。（各展示場名横の数字は展示場面積）

オセアニア 660㎡

移動と拡散　海での暮らし　島での暮らし
外部世界との接触　先住民のアイデンティティ表現

海がほとんどの面積を占めているオセアニアには、大小数万をこえる島々が点在しています。 そこには、発達した航海術をもち、根栽農耕を営む人々が暮らしてきました。「移動と拡散」「海での暮らし」「島での暮らし」では、資源の限られた島環境で、さまざまな工夫をして生活してきた様子を展示しています。「外部世界との接触」「先住民のアイデンティティ表現」では、外の世界と出会うなかで、人びとが伝統文化をどのように継承、発展させてきたかを紹介しています。

アメリカ 320㎡

出会う　食べる　着る
祈る　創る

広大なアメリカ大陸には、極地から熱帯雨林まで、さまざまな自然環境が見られます。 人びとは、それぞれの環境に応じた生活を営んできました。 一方で、ヨーロッパ人による征服と植民の歴史を経験したこの地には、日常生活の隅々まで、外来の文化が浸透していきました。 ここでは衣、食、宗教に焦点をあて、アメリカ大陸の多様性と歴史の重なりを明らかにするとともに、土着の文化資源に現代的価値を見出そうとする芸術家や工芸家のすがたを紹介しています。

ヨーロッパ 250㎡

生業と一年　宗教・信仰
産業化とともに　変動するヨーロッパ

ヨーロッパは、16世紀から20世紀にかけて、キリスト教や近代の諸制度をはじめ、さまざまな技術や知識を世界各地に移植しました。 現代、この流れが逆転するなかで、世界中からの移民とともに、その文化も社会の一部となりつつあります。 ここでは、時間の流れに注目しながら伝統的な生活様式と宗教、近代の産業化、さらに現代の新しい動きが層をなしてヨーロッパをつくりあげていることを示しています。

アフリカ 500㎡

歴史を掘り起こす　憩う　働く
装う　祈る　アフリカの今

人類誕生の地とされるアフリカは、常に外部世界と結びつきながら変化を重ねてきました。 私たちが、現在目にするアフリカ大陸の中の、文化や言語の多様性は、そうした変化の結果にほかなりません。 人びとの「歴史を掘り起こす」営みに目を向けるとともに、現在のアフリカに生きる人びとの生活のありさまを「憩う・働く・装う・祈る」の4つのコーナーに分けて紹介しています。

西アジア 310㎡

信仰
砂漠のくらし
パレスチナ・ディアスポラ
日本人と中東
音文化とポップカルチャー

中東ともよばれる西アジアの人びとは、自分たちが暮らす地域をマシュリク（日出ずる地）とよび、マグリブ（日没する地）とよばれる北アフリカと深い関係を保ってきました。乾燥地帯が大部分を占め、遊牧を生業とする人びとが移動する一方、バグダードやカイロなどでは古来より都市文化が栄えてきました。多くの住民はムスリムですが、ユダヤ教やキリスト教発祥の地でもあります。地球規模の変動の時代に移りゆく人びとの暮らしを紹介しています。

南アジア 600㎡

宗教文化―伝統と多様性　生態となりわい
都市の大衆文化　染織の伝統と現代　躍動する南アジア

南アジア地域は、北部の山岳地帯から西はアラビア海沿岸、東はベンガル湾沿岸にいたるさまざまな自然環境のもと、多様な宗教や文化、生活様式をもつ人びとが共存しあう知恵を育んできました。経済発展が著しい現代においても、その知恵は保たれています。この展示では、宗教文化や生業・工芸の多様性、都市を中心とした活気あふれる大衆文化、またグローバル化のなかで花ひらく染織文化のすがたを紹介しています。

東南アジア 730㎡

生業　村の日常　都市の風景　芸能と娯楽

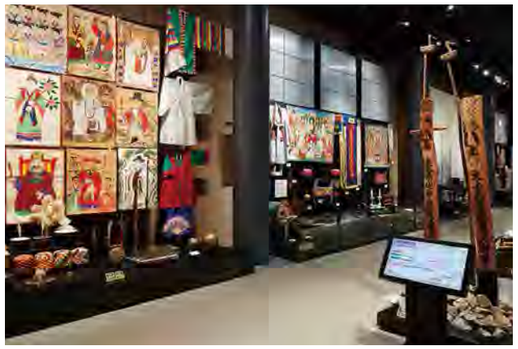
森と海に囲まれた東南アジア。熱帯・亜熱帯の気候にくらす人びとは、早朝の涼しい時間から働きはじめ、40度近くに達する日中は屋内で昼寝などをして暑さをしのぎます。夕方、スコールが通り過ぎた後は、少し暑さが和らぎ、人びとは買い物や農作業に出かけます。日が落ちて涼しくなると、友人や家族と屋台に出かけたり、演劇を見たりして余暇を楽しみます。本展示場では、「東南アジアの1日」をテーマに、その多彩な民族文化を紹介しています。

中央・北アジア 710㎡

自然との共生　社会主義の時代　中央アジア
モンゴル　シベリア・極北

中央・北アジアは、ユーラシア大陸の北東部を占める広大な地域です。古くから東西南北をむすぶ交渉路としての役割を担い、多様な民族が行き交ってきました。20世紀に社会主義を経験した後、市場経済に移行し、グローバル化の波にさらされながら伝統を再評価する動きがみられます。「自然との共生」「社会主義の時代」というふたつの共通テーマをふまえて、「中央アジア」「モンゴル」「シベリア・極北」の3つの地域に生きる人びとの今を紹介しています。

東アジア　朝鮮半島の文化 330㎡



精神世界　住の文化　食の文化　衣の文化
あそびの文化　知の文化

朝鮮半島の人びとは、外部の民族から影響を受けつつも、独自の文化を育んできました。有史以前は東シベリアの諸民族から、その後は中国から取り入れた文化要素を、独自のものに再編し、世界に例を見ないほど高度に統合された文化を獲得してきました。近代には日本に植民地支配され、独立後にはふたつの分断国家として急速な近代化を進めました。そして現代には、積極的に世界に進出する韓国人や、コリア系の海外生活者の姿も見られます。こうした文化の歴史的な重なりや躍動性を、精神世界、衣食住、あそびと知をテーマに紹介しています。

東アジア 中国地域の文化 660㎡

生業　民族楽器　チワン族の高床式住居　装い　工芸
台湾原住民族　宗教と文字　華僑・華人　継承される伝統中国

中国地域では、広大な面積と高低差のある地形がうみだす多様な自然環境のもと、さまざまな民族文化が育まれてきました。漢族が人口の90%以上を占め、平野部を中心に全国に居住しています。大陸の55の少数民族は、おもに西南、西北、東北地方の高地や草原に居住しており、台湾には漢族のほか先住のオーストロネシア系民族が居住しています。また、世界各地に、中国を故郷とする華僑・華人がくらしています。多様な生活環境から生みだされたさまざまな民族の文化を、歴史や地域性をふまえ、生業、装い、楽器、住居、工芸、宗教と文字、漢族の婚礼や祖先祭祀、台湾の原住民族、華僑・華人をテーマに紹介しています。

東アジア　アイヌの文化 270㎡

アイヌとは　カムイと自然　現代そして未来

アイヌは、北海道を中心に日本列島北部とその周辺にくらし、寒冷な自然環境のもとで独自の文化をはぐくんできた先住民族です。江戸時代に幕府による支配が始まり、明治時代に同化がすすめられると、アイヌは差別を受け生活に困るようになりました。しかし近年、日本政府はその歴史的事実を認め、アイヌ民族を尊重した政策に取り組みはじめました。ここでは、伝統を継承しつつ、あらたな文化を創造する人びとの姿を紹介しています。

東アジア 日本の文化 1,460㎡

祭りと芸能　日々のくらし　沖縄のくらし
多みんぞくニホン

北海道から沖縄県まで、南北に細長い日本列島は、多様な自然に恵まれています。こうした環境のなかで、隣接する諸文化と影響しあいながら、さまざまな地域文化を展開してきました。また、近年では多くの外国人が私たちの隣人として生活をともにしています。ここでは、「祭りと芸能」、「日々のくらし」、「沖縄のくらし」、「多みんぞくニホン」という4つの角度から、日本文化の様相を展示しています。

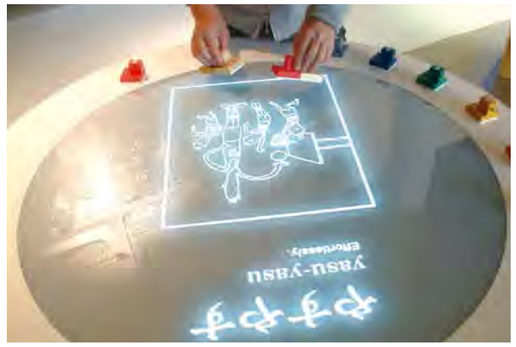
通文化展示

音楽 550㎡

太鼓　荒ぶる音　**ゴング**　伝え交わる音
チャルメラ　演じる音　**ギター**　歴史の中の音

私たち人類は、音や音楽によって意志や感情をつたえ、自分の位置を知り、訪れたことのない場所や過ぎ去った時に思いを馳せ、心を奮い立たせたり慰めたりしてきました。また、神仏や精霊など見ることのできない存在と交わってきました。この展示では、音や音楽と私たちの存在とのかかわりを、世界各地の楽器の例を通して考えます。

言語 170㎡



言葉を構成する要素　**言語の多様性**　**世界の文字**

音声や身ぶりを媒体とすることばは、高度に発達した伝達手段で、感情から科学的な知識まで多くの情報を伝えることができます。文化の多様性を反映すると同時に、人間のもつ認知能力や創造性などを生みだすことばは、人類のもつかけがえのない資産です。インタラクティブな仕掛けを通して、ことばの仕組みと世界のことばの多様性について紹介しています。

インフォメーション・ゾーン

イントロダクション

イントロダクション展示は、民博の展示の見方、文化人類学・民族学の考え方を直感的に身につけていただけるよう工夫した、文字通りのイントロダクション(＝導入)のための展示です。ここから世界への旅が始まります。

ビデオテーク

世界の人びとの儀礼や芸能、生活の様子、あるいは展示資料の背景を紹介する映像展示として、昭和52年に世界ではじめて本館が開発しました。その後改良を重ね、マルチメディア番組や研究者がフィールドワークで取材した貴重な研究用映像資料も公開しています。平成24年からの現行システムでは、番組をより多角的に検索できるようメニュー画面を充実させるとともに、ブース内部の雰囲気も明るく変え、視聴環境を整えました。また、ユニバーサルデザインを意識したブースでは、車いすに乗ったままご利用いただけます。
(平成30年度リクエスト件数：49,974件)

探究ひろば

リサーチデスク　調べて深める
研究の現場から　知ってつながる
世界をさわる　感じて広がる

展示資料の情報を検索して調べることのできる「リサーチデスク」、研究者が取り組んでいる調査を紹介する「研究の現場から」、展示資料を見てさわって理解する「世界をさわる」の3つのコーナーを通して、民博の研究や展示をより詳しく知ることができます。展示場で見た資料についてもっと知りたい、民博の研究者って何を調査しているの、モノと身近に接してみたい、という探究心を満たし、知識をさらに深める場としてご活用ください。

特別展示

開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ―70年万博収集資料」

平成30年3月8日(木)～ 5月29日(火)
主催　国立民族学博物館
実行委員長　野林厚志
実行委員　［館内］日高真吾、平井京之介、伊藤敦規、卯田宗平、川瀬 慈、新免光比呂、鈴木 紀、丹羽典生、南真木人、三島禎子、吉岡 乾、内田吉哉
協力　朝日新聞社、大阪府、一般社団法人関西環境開発センター、京都新聞社、産経新聞社、一般財団法人千里文化財団、日本経済新聞社
後援　毎日新聞社、読売新聞社

1970年の大阪万博では太陽の塔の地下空間に、世界の民族資料が展示されました。それらは、1968年から1969年にかけて、「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団(EEM)」が収集したもので、民博開館時の主要な収蔵品となりました。本展では、EEMの集めた世界の諸民族の仮面、彫像、生活用具を展示し、収集活動の即席やコレクションの生い立ちを紹介するとともに、60年代後半から70年代にかけて、世界が大きく動いていく状況のなかでの民族文化や地域社会の様相を描き出しました。

「工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」

平成30年9月13日(木)～ 11月27日(火)
主催　国立民族学博物館
実行委員長　日高真吾
実行委員　［館内］園田直子、寺村裕史
　　［館外］小谷竜介(東北歴史博物館)、今井雅之(元東北歴史博物館)、永山広樹(静岡文化芸術大学)、加藤謙一(金沢美術工芸大学)、北村 繁(漆芸家)、永山雅大(東北工業大学)
共同企画　東北歴史博物館
共催　金沢美術工芸大学
特別協力　静岡文化芸術大学
協力　株式会社三英、一般財団法人千里文化財団
後援　朝日新聞社、京都新聞社、産経新聞社、日本経済新聞社、毎日新聞社、読売新聞社

日本における工芸の近代化、産業化の推進と東北地方の工芸業界の発展を推進した国立工芸指導所は、まさに日本におけるインダストリアルデザインの原点の一つです。本展では、世界にほこる日本の工芸品が、国立工芸指導所の精神を受け継ぎつつ、どのように世界に挑戦するのか。このような点に着目し、これまでの工芸、これからの工芸を考えた展示となりました。

特別展示一覧

展覧会名	展覧会期間
「大アンデス文明展―よみがえる太陽の帝国インカ」	平成元年9月14日～12月12日
「赤道アフリカの仮面―秘められた森の精霊たち」※	平成2年3月15日～5月31日
「海を渡った明治の民具　モース・コレクション展」	平成2年9月13日～12月4日
「ケンペル展―ドイツ人の見た元禄時代」※	平成3年2月7日～4月16日
「大インド展―ヒンドゥー世界の神と人」	平成3年8月1日～11月5日
「文明の十字路・ダゲスタン―コーカサスの民族美術」※	平成4年3月12日～5月19日
「オーストラリア・アボリジニ展―狩人と精霊の5万年」	平成4年9月10日～12月8日
「民族学の先覚者　鳥居龍藏の見たアジア」※	平成5年3月11日～5月14日
「アイヌモシリ―民族文様から見たアイヌの世界」	平成5年6月10日～8月17日
「ジャワ更紗―その多様な伝統の世界」	平成5年9月9日～11月30日
「台湾先住民の文化　伝統と再生」※	平成6年3月10日～5月24日
「絨毯―シルクロードの華」	平成6年9月8日～11月29日
「ラテンアメリカの音楽と楽器」※	平成7年3月16日～5月30日
「現代マヤ―色と織に魅せられた人々」	平成7年9月14日～11月30日
「シーボルト父子のみた日本」	平成8年8月1日～11月19日
「異文化へのまなざし―大英博物館コレクションにさぐる」	平成9年9月25日～平成10年1月27日
「なかはどうなってるの? ―民族資料をX線でみたら」※	平成10年3月12日～5月26日
「大モンゴル展―草原の遊牧文明」	平成10年7月30日～11月24日
「南太平洋の文化遺産:ジョージ・ブラウン・コレクション」※	平成11年3月11日～5月31日
「越境する民族文化―いきかう人びと、まじわる文化」	平成11年9月9日～平成12年1月11日
「みんぱくミュージアム劇場―からだは表現する」	平成12年3月18日～5月14日
「進化する映像―影絵からマルチメディアへの民族学」	平成12年7月20日～11月21日
「大正昭和くらしの博物誌―民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミューゼアム」	平成13年3月15日～6月5日
「ラッコとガラス玉」	平成13年9月20日～平成14年1月15日
「2002年ソウルスタイル」	平成14年3月21日～7月16日
「世界大風呂敷展　布で包む　ものと心」	平成14年10月3日～平成15年1月14日
「マンダラ―チベット・ネパールの仏たち」	平成15年3月13日～6月17日
「西アフリカ おはなし村」	平成15年7月24日～11月25日
「アイヌからのメッセージ―ものづくりと心」	平成16年1月8日～2月15日
「多みんぞくニホン―在日外国人のくらし」	平成16年3月25日～6月15日

展覧会名	展覧会期間
「アラビアンナイト大博覧会」	平成16年9月9日～12月7日
「きのうよりワクワクしてきた。」	平成17年3月17日～6月7日
「インド サリーの世界」	平成17年9月8日～12月6日
「みんぱくキッズワールド：こどもとおとなをつなぐもの」	平成18年3月16日～5月30日
「更紗今昔物語―ジャワから世界へ」	平成18年9月7日～12月5日
「聖地★巡礼―自分探しの旅へ」	平成19年3月15日～6月5日
「オセアニア大航海展―ヴァカ モアナ、海の人類大移動」	平成19年9月13日～12月11日
「深奥的中国―少数民族の暮らしと工芸」	平成20年3月13日～6月3日
「アジアとヨーロッパの肖像」	平成20年9月11日～11月25日
「千家十職×みんぱく：茶の湯のものづくりと世界のわざ」	平成21年3月12日～6月14日
「自然のこえ 命のかたち―カナダ先住民の生みだす美」	平成21年9月10日～12月8日
「彫刻家エル・アナツイのアフリカ―アートと文化をめぐる旅」	平成23年9月16日～12月7日
「ウメサオ タダオ展」	平成23年3月10日～6月14日
「千島・樺太・北海道　アイヌのくらし―ドイツコレクションを中心に」	平成23年10月6日～12月6日
「今和次郎　採集講義―考現学の今」	平成24年4月26日～6月19日
「世界の織機と織物―織って！みて！織りのカラクリ大発見」	平成24年9月13日～11月27日
「マダガスカル　霧の森のくらし」	平成25年3月14日～6月11日
「渋沢敬三記念事業　屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」	平成25年9月19日～12月3日
「イメージの力―国立民族学博物館コレクションにさぐる」	平成26年9月11日～12月9日
「韓日食博―わかちあい・おもてなしのかたち」	平成27年8月27日～11月10日
「夷酋列像―蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界―」	平成28年2月25日～5月10日
「見世物大博覧会」	平成28年9月8日～11月29日
「ビーズ―つなぐ・かざる・みせる」	平成29年3月9日～6月6日
「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」	平成29年8月10日～10月10日
「太陽の塔からみんぱくへ―70年万博収集資料」	平成30年3月8日～5月29日
「工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」	平成30年9月13日～11月27日
「子ども／おもちゃの博覧会」	平成31年3月21日～令和元年5月28日

※印は、平成13年以前は企画展に区分されていましたが、現在はすべて特別展に統一されています。

企画展示

「アーミッシュ・キルトを訪ねて ―
そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」

平成30年8月23日(木)～12月25日(火)

主催　国立民族学博物館
実行委員長　鈴木七美
実行委員　［館内］藤本透子
［館外］野村奈央(埼玉大学)、踊 共二(武蔵大学)、大藪千穂(岐阜大学)、
中 朋美(鳥取大学)
協力　ネブラスカ大学リンカーン校インターナショナルキルトスタディセンター&ミュージアム、
エリザベスタウン大学ヤング再洗礼派敬虔派研究センター、
ゴーシェン大学メノナイト歴史図書館、アメリカンキルトスタディグループ

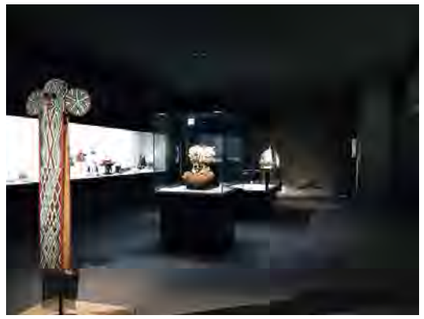
プレーン・ピープル(簡素な人びと)とも呼ばれるアーミッシュが無地の布をパッチワークしつくるベッドカバーは、あざやかな色合いと幾何学模様から生まれるデザインや細やかなステッチで20世紀後期に注目を集めました。 特に、厳格に教会コミュニティを守ろうとするオールドオーダー・アーミッシュは、現在も馬車を使用し公共の電気を引かず、公教育の期間を制限しています。 世界から孤立したようにみえる人びとは、どのように環境や周囲と交流してきたのでしょうか。 本展示では、みんぱくコレクションを素材として、キルトに織りこまれた日々の暮らしや物語、キルトが結ぶ世界との交流をたどりました。

巡回展示

巡回展「ビーズ ―つなぐ・かざる・みせる」

平成30年9月22日(土)～11月25日(日)　岡山市立オリエント美術館
担当者　池谷和信

平成29年3月～6月に本館特別展として開催した「ビーズ―つなぐ・かざる・みせる」展を、岡山県の岡山市立オリエント美術館にて巡回展示しました。



巡回展「工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」

平成30年12月6日(木)～19日(水)　静岡文化芸術大学
平成31年1月11日(金)～2月28日(木)　金沢美術工芸大学
担当者　日髙真吾

本館で開催した特別展「工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」(平成30年9月13日～11月27日)を巡回展示しました。

共催展示

共催展示「国立民族学博物館コレクション　貝の道」

平成30年6月23日(土)～9月2日(日)　神奈川県立近代美術館
担当者　池谷和信

民博のコレクションから、世界中のさまざまな民族によって作られた貝細工約160点を展示しました。

国際協力・研修

JICA課題別研修「博物館とコミュニティ開発コース」の実施“Museums and Community Development”

本コースは、博物館の運営に必要な、収集・整理・保存・展示・教育に関する実践的技術の研修を実施し、博物館を通じて各国の文化の振興に貢献できる人材を育成するものです。従来から、国際協力機構(JICA)主宰の「博物館技術コース」の一環として、本館で約3週間にわたり「博物館学国際協力セミナー」を実施してきましたが、平成16年度からは、本館がJICAから全面的委託を受け、滋賀県立琵琶湖博物館と共同で、4ヶ月にわたる研修を「博物館学コース」として実施し、毎年、開発途上の国や地域から約10名を外国人受託研修員として受け入れています。研修は、博物館の諸活動に直接かかわる人々に特化したコースとなっています。 平成24年からは東日本大震災後の状況を踏まえ、博物館資料の保安や防災のカリキュラムを強化するとともに、博物館運営について自らが立案し、実践・普及できるような研修項目、さらには観光関連分野との連携も追加しました。
平成27年度からは、「博物館とコミュニティ開発」と名称変更し、博物館が地域社会に果たす役割により重点を置いた研修を3ヶ月にわたり行いました。 平成30年度は、アルメニア・エクアドル・フィジー・ジャマイカ・ヨルダン・パプアニューギニア・ソロモン・スーダン・トルコ・ザンビアの10ヶ国・地域から10名の研修員を受け入れ、9月28日から12月14日まで研修を行いました。 本館における実施だけではなく、新潟県中越大震災の被災地や中越メモリアル回廊、東京国立博物館や国立科学博物館、横浜美術館、三重県総合博物館、広島平和記念資料館などへの研修旅行も行いました。 また、研修員全員が自国の博物館の活動や課題を報告し、検討する公開フォーラム「世界の博物館2018」を平成30年11月3日に本館で開催しました。 56名の参加者があり、報告者と活発な意見交換を展開しました。
コースの名称と運営形態は発展的に更新していますが、博物館を通じた国際交流の促進というコースの目的は、一貫して継続しており、平成31年3月までに、世界各地からの研修修了者及びオブザーバーは61ヶ国・地域の258名におよび、国際的ネットワークを築いています。

公開フォーラム

個別研修(予防保存)

民博での研修

琵琶湖研修

着付体験

閉講式

博物館社会連携

本館では、国内外の博物館や大学などとの学術連携を通して、文化資源の系統的、有機的活用を実践するためのネットワークづくりを試みてきました。また、さまざまな団体と連携して、広く社会へ貢献する事業や活動を展開しています。

貸出用学習キット「みんぱっく」

平成30年度　貸出件数 204件　利用者総数 24,596名

学校や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として、学習キット「みんぱっく」の貸出を実施しています。「みんぱっく」は世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、15種類26パックを用意しています。異文化との出会いにおいてどのようにものを見つめ、それらと語らうことができるのか、その先にある物語をどう読みとるのかという、本館ならではのコンセプトで企画されています。

みんぱっく
「世界のムスリムのくらし1―日常の中の祈り」

みんぱっく
「世界のムスリムのくらし2―同時代を生きる」

貸出パック

- ●極北を生きる―カナダ・イヌイットのアノラックとダッフルコート
- ●アンデスの玉手箱―ペルー南高地の祭りと生活
- ●ジャワ島の装い―宗教と伝統
- ●インドのサリーとクルター
- ●アラビアンナイトの世界
- ●イスラム教とアラブ世界のくらし
- ●ソウルスタイル―こどもの一日
- ●ソウルのこども時間
- ●プリコラージュ
- ●アイヌ文化にであう
- ●アイヌ文化にであう2―樹皮からつくる着物
- ●モンゴル― 草原のかおりをたのしむ
- ●あるく、ウメサオタダオ展
- ●世界のムスリムのくらし1―日常の中の祈り
- ●世界のムスリムのくらし2―同時代を生きる

ワークショップ

本館の研究者の研究成果を社会に還元することをめざし、ものづくりなどの体験型プログラムを通して、世界の文化を紹介しています。

実施日	実施ワークショップ	講師
平成30年4月28日(土)	開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ―70年万博収集資料」 関連ワークショップ「あつまれ！みんぱく資料調査収集団―EEM収集ミッションに迫る！」	野林厚志・鈴木 紀・吉岡 乾
平成30年9月23日(日・祝)	企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて―そこに暮らし、そして生きる人びと」 関連ワークショップ「パッチワーク・キルトのある生活」	鈴木七美 黒羽志寿子(キルト作家)
平成30年9月22日(土)・29日(土)・10月13日(土)・21日(日)・11月3日(土・祝)・18日(日)	特別展「工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」 関連ワークショップ「オリジナル木製スプーンをつくってみよう」	日高真吾
平成30年12月9日(日) 平成31年1月14日(月・祝)	年末年始展示イベント「いのしし」関連プログラム「かざってポン！へんしん いのしし」	丹羽典生

ワークショップ「あつまれ！みんぱく資料調査収集団―EEM 収集ミッションに迫る！」

ワークショップ「パッチワーク・キルトのある生活」

ワークショップ「かざってポン！へんしん いのしし」

ワークシート

テーマに沿って展示場を見学できるもの、特別展や企画展にまつわるもの、自主学習ができるものなどをご用意しています。本館のホームページ上に掲載しており、ダウンロードして自由にご利用いただけます。

カムイノミ儀礼と北海道アイヌ協会技術者研修

本館では、公益社団法人北海道アイヌ協会とのあいだに協定を結んで、ふたつの事業を実施しています。ひとつはカムイノミ儀礼の実施です。アイヌ語のカムイノミは「神への祈り」という意味であり、その実施は、本館が所蔵するアイヌの標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としています。以前は萱野茂氏（故人）を祭司に非公開でおこなわれていました。平成19年度からは、社団法人北海道ウタリ協会（現・公益社団法人北海道アイヌ協会）の会員が順にカムイノミとあわせてアイヌ古式舞踊の演舞を実施し、公開しています。平成30年度は八雲アイヌ協会・苫小牧アイヌ協会の協力を受けました。
もうひとつの事業は、アイヌ協会が派遣する伝統工芸技術者の外来研究者としての受け入れです。本館の所蔵する資料の研究・活用による学術研究の進展とアイヌ民族の文化の振興を目的としています。

カムイノミ儀礼

音楽の祭日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、平成14年から日本でも「音楽の祭日」として全国で開催されています。
本館もその趣旨に賛同し、平成15年から音楽を愛する一般市民に広く本館施設を開放して実施しています。平成30年度は、6月17日（日）に25のグループや個人が、さまざまな楽器による演奏をおこないました。

博学連携事業

校外学習や遠足など博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介することを目的として、春と秋の年に2回「先生のためのガイダンス」をおこない、授業での博物館活用の促進を図っています。平成30年度は、春のみ開催し（秋は地震の影響により中止）、35団体116名の参加がありました。また、中学生に「職場体験活動」の機会を提供しており、平成30年度は5校13名を受け入れました。

ボランティア団体の活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動をサポートする自律的な組織として平成16年9月に発足した団体です。
展示場内における視覚障がい者の展示体験をサポートするプログラム「視覚障害者むけ本館展示場案内サポート」や、主に小学生を対象とした体験型見学プログラム「わくわく体験 in みんぱく」、一般来館者向けのものづくりワークショップなど、多岐に広がる活動を本館との協働で進めています。また、館外でおこなわれるワークショップフェスやボランティア交流会にも積極的に参加し、他の博物館や施設との交流を深めています。

視覚障害者むけ本館展示場案内サポート

わくわく体験 in みんぱく

ナレッジキャピタル ワークショップフェス

広報・事業

世界の諸民族の文化について、最新の研究成果を社会に公開するため、各種事業や広報活動を実施しています。

みんぱくゼミナール

毎月第3土曜日に、研究部の教員などが最新の研究成果をわかりやすく講演しています。

平成30年度実施　受講者総数 1,990名　（平成29年度 2,409名）

□印は特別展関連事業　○印は企画展関連事業

実施回数	実施日	担当講師	演題
□479回	平成30年4月21日(土)	松原正毅(国立民族学博物館名誉教授) 野林厚志 丹羽典生	EEMという「運動」
480回	平成30年5月19日(土)	菅瀬晶子	聖都エルサレム
481回	平成30年6月16日(土)	山本泰則	データベースのはしご
○482回	平成30年9月8日(土)	鈴木七美	アーミッシュ・キルトを巡る旅―いくつもの人生物語へ
□483回	平成30年9月15日(土)	日高真吾 永山広樹(静岡文化芸術大学) 北村 繁(漆芸家)	特別展「工芸継承」からのメッセージ
□484回	平成30年10月20日(土)	日高真吾 永山雅大(東北工業大学) 宮城の工芸職人、関西の工芸職人	工芸を語る―宮城の職人からのメッセージ
485回	平成30年11月17日(土)	太田心平	韓国の若者がみた現代韓国―生きづらさを個人レベルでどうするか
486回	平成30年12月15日(土)	韓 敏	毛沢東バッジの過去と現在
487回	平成31年1月19日(土)	三尾 稔	インターネットで神さまと『ともだち』になる―当世ヒンドゥー教事情
488回	平成31年2月16日(土)	齋藤 晃	インカ帝国から先住民共同体へ―植民地期アンデスにおける先住民の集住化
489回	平成31年3月16日(土)	寺田吉孝	チャルメラ―過去から響く音

第480回　「聖都エルサレム」

第483回　「特別展「工芸継承」からのメッセージ」

第489回　「チャルメラ―過去から響く音」

みんぱくウィークエンド・サロン―研究者と話そう

研究部のスタッフと来館者が、展示場内でより身近に語り合いながら、みんぱくの研究を知ってもらうことを目的に、開館30周年記念事業として平成19年度に始まりました。平成30年度も引き続き、日曜日に計33回開催し、参加者は計1,283名でした。

みんぱくウィークエンド・サロン―研究者と話そう

研究公演　平成30年度実施　参加者総数 663名

文化人類学・民族学に関する理解を深めてもらうことを目的として、世界の諸民族の音楽や芸能などの公演を実施しています。

東北の復興を願って―夢、希望、想いをこめて

実施日　平成30年10月28日(日)
司会・解説　日高真吾
出演　濱守栄子、絵美夏、中澤宗幸
参加者数　188名

薫り立つインド宮廷の華―弦楽器サロードの至芸

実施日　平成31年3月2日(土)
司会　寺田吉孝
解説　田森雅一(国立民族学博物館特別客員教員)
出演　イルファーン・ムハンマド・ハーン、スバジット・ブラーマチャーリ
参加者数　475名

研究公演「東北の復興を願って―夢、希望、想いをこめて」

ギャラリー公演（企画展「旅する楽器―南アジア弦の響き」関連）　参加者総数 633名

実施回数	実施日	司会	出演	参加者数
第1回	平成31年3月9日(土)	寺田吉孝	的場裕子(ヴィーナー)	156名
第2回	平成31年3月17日(日)	寺田吉孝	伊藤香里(サーランギー)、勝田信明(マーダル)	226名
第3回	平成31年3月30日(土)	寺田吉孝	小日向英俊(シタール)、藤澤ばやん(タブラー)	251名

みんぱく映画会　平成30年度実施　参加者総数 1,871名

上映される機会の少ない文化人類学・民族学に関する貴重な映像資料などを教員の解説を交えて上映しています。

映画が拓く新たなバリアフリーの世界

実施日	担当講師	題名	参加者数
平成30年11月24日(土)	飯泉菜穂子、川瀬 慈、 西原孝至(上映作品監督) 山上徹二郎(上映作品企画・プロデューサー) 大河内直之(上映作品企画・製作)	もうろうをいきる	137名

みんぱく映像民族誌シアター

実施日	担当講師	題名	参加者数
平成31年1月12日 (土)	福岡正太、池谷和信	カラハリ砂漠のトランスダンス	62名
平成31年1月26日 (土)	福岡正太、南真木人	ネパールの30年	81名
平成31年2月9日 (土)	寺田吉孝、髙正子(神戸大学) 安聖民(パンソリ演奏家)	アリラン峠を越えていく― 在日コリアンの音楽	70名
平成31年2月17日 (日)	福岡正太 横山廣子(国立民族学博物館名誉教授)	中国雲南省大理盆地の回族	62名

みんぱくワールドシネマ

「映像から考える〈人類の未来〉」のテーマにふさわしい映画を選び、研究者の解説による上映会をシリーズで実施します。立場による考え方の違いを互いに認め合いながら、公正で平等な社会をどのように実現すればよいのか、世界各地に視野を広げて、映画を通して考えます。

	実施日	担当講師	題名	参加者数
第41回	平成30年6月9日 (土)	鈴木 紀、菅瀬晶子	少女は自転車にのって	378名
第42回	平成30年9月24日 (月)	鈴木 紀、小長谷有紀	僕たちの家に帰ろう	328名
第43回	平成30年11月4日 (日)	鈴木 紀、八木百合子	彷徨える河	303名
第44回	平成31年2月23日 (土)	菅瀬晶子、藤元優子(大阪大学)	ママのお客	450名

連携講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」

平成26年度に一般社団法人ナレッジキャピタルとの間に取り交わした連携協力協定に基づき、連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」を開講しました。この講座では、大阪・梅田のカフェを会場として、研究者がそれぞれの研究対象をわかりやすく解説しました。

連携講座「みんぱく×ナレッジキャピタル 工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」　参加者総数 111名

回数	実施日	担当講師	題名
第1回	平成30年9月26日(水)	日高真吾	特別展「工芸継承―東北発、 日本インダストリアルデザインの原点と現在」を振り返る
第2回	平成30年9月28日(金)	永山広樹	インダストリアルデザインの教育の現場から
第3回	平成30年10月4日(木)	北村 繁	伝統工芸のデザインを考える―制作と修理の経験から
番外	平成30年10月7日(日)	日高真吾	工芸を継承する―みんぱく特別展示ツアー

その他の連携事業

平成30年11月17（土）・11月18日（日）に、北大阪の8市3町の美術館・博物館の文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」を本館にて開催し、展示やワークショップ、伝統文化の披露等がおこなわれました。

また、吹田市と双方の発展と充実に寄与し、地域連携を積極的に推進することを目的とした「国立民族学博物館と吹田市との連携協力に関する基本協定」を締結し、「吹田市5大学・研究機関　生涯学習ナビ」（http：//www.suita5u.com）への参画等、情報発信を進めています。

平成30年3月下旬から4月にかけて、吹田市情報発信プラザ「Inforestすいた」で「みんぱくフェア」を開催し、本館の活動を紹介しました。（来場者数47,910名）

マスメディアを通じた広報

広く社会に本館の研究や博物館活動について広報するため、マスメディアを通じた広報活動を展開しています。「報道関係者と民博との懇談会」（毎月第3木曜日開催）において、「研究の窓」などのコーナーをもうけ、みんぱくの研究や博物館活動を積極的に紹介しています。30年度はテレビ（25件）、ラジオ（66件）、新聞（570件）、雑誌（126件）、ミニコミ誌（169件）、その他（204件）の各媒体総数1,160件で、本館の活動が紹介されました。

「旅・いろいろ地球人」
平成21年4月から毎日新聞夕刊（毎週木曜日）に掲載
平成17年4月から21年3月までは、「異文化を学ぶ」というタイトルで掲載

「みんぱくモノ語り」
平成29年10月から平成30年12月まで産経新聞夕刊（月3～4回）に掲載

出版活動

要覧

国立民族学博物館要覧2018
National Museum of Ethnology: Survey and Guide 2018-19

広報・普及

MINPAKU Anthropology Newsletter
月刊みんぱく
みんぱくカレンダー

展示解説

国立民族学博物館展示案内（英語版）
展示図録「太陽の塔からみんぱくへ―70年万博収集資料」
展示図録「工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」

利用案内

本館案内リーフレット（日本語、英語、中国語、ハングル、こども用、点字）
展示解説シート（日本語、英語）
団体見学利用案内
特別展展示案内リーフレット

design: mitsuo katsui

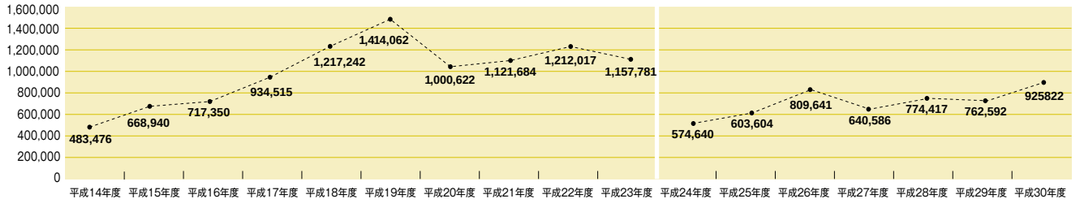
インターネット

ホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/
本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育情報の他、刊行物、文献図書資料、標本資料などあらゆる情報を世界に発信しています。

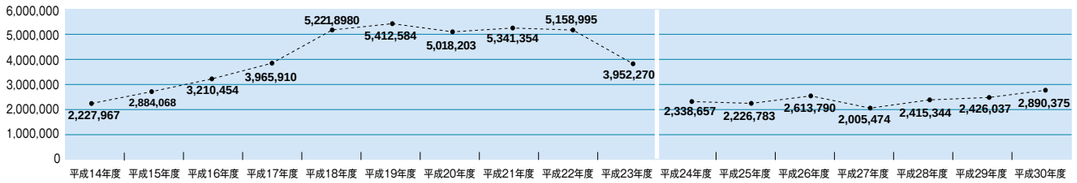
メールマガジン　http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews
メールマガジン「みんぱくe-news」を月1回発行し、最新の研究情報や、特別展・企画展情報、みんぱくゼミナール等の各種事業のお知らせを配信しています。

ソーシャルメディア　Facebook　http://www.facebook.com/MINPAKU.official
Twitter　http://twitter.com/MINPAKUofficial
YouTube　http://www.youtube.com/MINPAKUofficial
Instagram　https://www.instagram.com/MINPAKUofficial
さまざまなソーシャルメディアを活用して、研究、博物館活動を情報発信するとともに、本館及び文化人類学・民族学に関心をもつ人たちが交流する場を提供しています。

訪問者数（Visits）　平成30年度　925,822



ページビュー数（Page Views）　平成30年度　2,890,375



※平成24年度より、統計方法を変更しました。
※アクセス解析の不備により、平成29年12月19日～平成30年1月11日は集計に含まれておりません。

平成30年度の入館者数

年間入館者

入館者総数	216,158人
1日平均	875人
開館からの累計	11,187,804人

入館者内訳

一般	135,676人
高・大学生	24,061人
小・中学生	51,199人
小学生未満	5,222人

特別展示	
開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ―70年万博収集資料」（平成30年3月8日～5月29日）	40,865人
特別展「工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」（平成30年9月13日～11月27日）	22,881人
企画展示	
画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて―そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」（平成30年8月23日～12月25日）	62,356人
巡回展示	
巡回展「ビーズ ―つなぐ・かざる・みせる」 岡山市立オリエント美術館（平成30年9月22日～11月25日）	6,993名
巡回展「工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」 静岡文化芸術大学（平成30年12月6日～12月19日）	556名
巡回展「工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」 金沢美術工芸大学（平成31年1月11日～2月28日）	259名

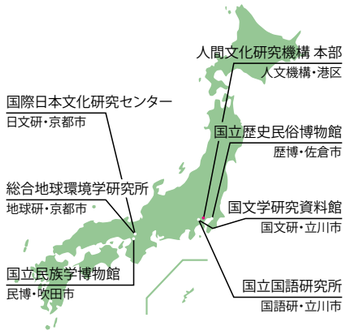
大学共同利用機関法人　人間文化研究機構 https://www.nihu.jp/

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構（略称：人文機構）は、4つの大学共同利用機関法人のうちの1つであり、人間文化研究にかかわる6つの大学共同利用機関で構成されています。それぞれの機関は、人間文化研究の各分野におけるわが国の中核的研究拠点、国際的研究拠点として基盤的研究を深める一方、学問的伝統の枠を超えて相補的に結びつき、国内外の研究機関とも連携して、現代社会における諸課題の解明と解決に挑戦しています。真に豊かな人間生活の実現に向け、人間文化の研究を推進し、新たな価値の創造を目指します。

4つの大学共同利用機関法人

研究推進・情報発信事業

人文機構は、平成28年度に総合人間文化研究推進センターと総合情報発信センターを設置しました。
2つのセンターでは、6つの機関をハブとした研究ネットワークを構築して国際共同研究を推進するとともに、国内外への積極的な発信や次代を担う若手研究者の育成に取り組みます。



人文機構本部と６つの大学共同利用機関の所在地

総合人間文化研究推進センター

6つの機関と国内外の大学等研究機関や地域社会との連携・協力を促進し、人間文化の新たな価値体系の創出に向けて、現代的諸課題の解明に資する組織的共同研究「基幹研究プロジェクト」を推進しています。

総合情報発信センター

人間文化にかかわる総合的学術研究資源をデジタル化することで、広く国内外の大学や研究者への活用を促進するとともに、社会との双方向的な連携を強化することで、研究成果の社会還元を推進しています。

総合人間文化研究推進センターが推進する基幹研究プロジェクト

機関拠点型	総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築
	日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築
	多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓
	大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出
	アジアの多様な自然・文化複合に基づく未来可能社会の創発
	人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築
広領域連携型	日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築
	アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開
	異分野融合による「総合書物学」の構築
ネットワーク型	地域研究推進事業：北東アジア、現代中東、南アジア
	日本関連在外資料調査研究・活用事業： ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用 バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用 北米における日本関連在外資料調査研究・活用 プロジェクト間連携による研究成果活用

総合情報発信センターの情報・発信事業

研究資源高度連携事業
nihu INT　https://int.nihu.jp
機構内外の情報資源を統合検索する、人間文化研究データベース

情報発信事業
リポジトリ　https://www.nihu.jp/ja/publication/database#repo
国際的に研究成果を発信するため各機関でリポジトリを公開
研究者データベース　http://nrd.nihu.jp
機構所属の研究者情報を一元的に公開する研究者データベース運用
国際リンク集　https://guides.nihu.jp/japan_links
日本文化研究情報への総合的アクセスを支援するためのリンク集を構築し運用
NIHU Magazine
https://www.nihu.jp/ja/publication/nihu_magazine
機構の最新の研究活動、成果を海外に発信するウェブマガジン

人文機構シンポジウム　https://www.nihu.jp/ja/event/symposium
研究活動及び研究成果を広く社会に発信

人文機構シンポジウム
第33回　鹿児島の歴史再発見－新しい地域文化像を求めて
第34回　市民とともに地域を学ぶ－日本と台湾にみる地域文化の活用術
第35回　中東と日本をつなぐ音の道―音楽から地球社会の共生を考える

社会連携事業
産業界や外部機関と連携し、研究成果の社会還元を推進
・味の素食の文化センターと共催でシンポジウムを開催
・大手町アカデミアと連携し、特別講座を開催
・国際交流基金と共催で「ジャポニスム2018」の公式シンポジウムを開催

歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業

機構（主導機関：歴博）、東北大学、神戸大学を中核として、全国各地の主に大学を中心に活動する「史料ネット」との連携構築を通じて、資料調査とデータ記録化、広域的相互支援体制の確立、資料保存研究等の歴史文化資料保全事業を推進します。さらに資料を活用した研究や教育プログラム開発、国内外に向けた情報発信を通じて、地域社会における歴史文化の継承と創成を目指します。

博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業

機構の6機関と大学等研究機関とが連携し、博物館および展示を活用して人間文化に関する最先端研究を可視化し、多分野協業や社会との共創により研究を高度化して新領域創成を図る研究推進モデル「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化サイクル」を構築します。また本事業においては、大学等におけるカリキュラムの提案・実践を行うとともに、研究展示・映像・フォーラム等の企画・制作・運営を通じて「人文知コミュニケーター」を育成し、社会の課題と向き合う新たな知の構築を目指します。

移動型展示ユニットによる消滅危機言語・方言の展示（於：羽田空港、撮影：籠宮隆之）

人文知コミュニケーター

展示など多様な発信媒体、機会を活用して人間文化研究の成果をわかりやすく社会に伝えるとともに、研究に対する社会からの要望、反響を吸上げ、研究現場に還元するスキルを有した研究者として、「人文知コミュニケーター」の組織的育成事業を実施しています。研究者と社会を「つなぐ人」として、社会連携や共創を推進し、人文学の振興、発展に貢献します。

大手町アカデミア人文機構特別講座
（於：読売新聞東京本社、写真提供：大手町アカデミア）

社会連携

地域社会や産業界などと連携し、人間文化研究成果の社会還元を推進しています。

平成30年度の連携事業

・味の素食の文化センターとシポジウム「地域と都市が創る新しい食文化」を共催
・大手町アカデミア（YOMIURI ONLINE、中央公論新社）特別講座
「漆（japan）から日本史が見える－『シーボルトの日本コレクション』を中心に」及び「世界から方言が消えたなら?－知られざる『弱小言語』の魅力」を開催
・国際交流基金と共催でジャポニスム2018シンポジウム「フランス人がみた日本／日本人がみたフランス」を開催

ジャポニスム2018シンポジウム「フランス人がみた日本／日本人がみたフランス」（於：パリ日本文化会館）

大学院教育

国立大学法人総合研究大学院大学（総研大）の基盤機関として、文化科学研究科に4つの機関が各機関の特色を生かした5つの専攻（博士後期課程）を設置し、高い専門性と広い視野を持った研究者を養成しています。また、機構の6つの機関では、他大学の大学院生を受け入れてその研究を支援するなど、次世代を担う人材育成に貢献しています。

文化科学研究科の各専攻

■地域文化学専攻（民博）
■比較文化学専攻（民博）
■国際日本研究専攻（日文研）
■日本歴史研究専攻（歴博）
■日本文学研究専攻（国文研）

基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構では、平成28年度より6カ年にわたり、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を実施しています。
みんぱくが担当しているのは、以下のプロジェクトです。 なお機関拠点型のプロジェクトに関しては12頁に掲載しています。

広領域連携型:
日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

みんぱくユニット「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」
代表者:日髙真吾

日本列島は、南北に長く、海岸部から平野部、そして中山間部に居住地が広がり、それぞれの環境に適応させた多様な地域文化を育んできました。 一方で、これらの地域文化は、グローバル化する社会変容のなかで、地域特有の文化が見えにくくなり、表面的には日本社会全体で画一化されたような印象を私たちに感じさせます。 また、多発する大規模災害からの復興で、コミュニティの再編を余儀なくされた地域は、それまで受け継がれてきた地域文化を再構築せざるを得ない状況になることもしばしば見られる現状があります。
そこで、本研究では、地域文化に着目し、さまざまな地域でどのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかの実情を明らかにします。また、これらの動向に人間文化研究がいかに貢献しうるのかを考察し、現在(いま)への社会貢献、未来への社会貢献を視野に入れた研究成果を目指すこととします。
具体的には、「地域文化の再発見」、「地域文化の保存」、「地域文化の活用」という三つの視点から研究を展開しています。その上で、平常時において埋没している地域文化を再発見し、その文化をそこに住まう地域住民と外部社会の双方にとって有意義な形で表象するためのシステムを構築します。

広領域連携型:
アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

みんぱくユニット「文明社会における食の布置」
代表者:野林厚志

本研究の目的は、食の概念とその体系的な実践とを、文明社会を支える文化装置としてとらえ、食の社会的機能や歴史動態を解明し、食をめぐる社会的共存や衝突の原理を探究することです。
食は個体の生命を維持するための基本的な営みであると同時に、文化や経済と深く関わる行為としてとらえられてきました。 一方で食糧資源の大量生産、大量廃棄、地球規模の人口増加と数億人にもおよぶ飢餓人口は、生態学的適応に乖離した現代社会の食の実態を物語っています。こうした現代社会の食に関わる諸問題を超域的な視点で連結させるとともに、異なる視点をもつ研究分野の協働として、人類史の視点からの文明の盛衰と食との関係、生態学的アプローチからの食の機能等を議論に組み込み、文明社会の中における食の健全なありかたを探究していくことも本研究の狙いです。
なお、本研究プロジェクトは総合地球環境学研究所が中心となり推進する「アジアにおける「エコヘルス」の新展開」の一つのユニット研究として実施しています。 「エコヘルス」は、医療や疾病研究の視点で捉えられてきた「健康」を、社会変容と環境変化が急速に進む近現代における、暮らしや生態環境、生業、食生活等との関わりから探究しようとする新たな研究の視座であります。

ネットワーク型:北東アジア地域研究
北東アジアにおける地域構造の変容:越境から考察する共生への道

中心拠点「自然環境と文化・文明の構造」
代表者:池谷和信

国立民族学博物館北東アジア地域研究拠点は、みんぱく館内の文化人類学・民族学およびその隣接分野の研究者、および連携機関である国立歴史民俗博物館の考古学の研究者を中心に構成され、北東アジアを対象に、人とモノの移動と交流、政治及び経済のシステムの導入と影響に着目して、先史時代から現代に至るまでの長期的な時間幅の中で、自然環境と文化、文明の構造と変容の解明を目指しています。
ここでの北東アジア地域とは、国・地域で言えばロシアのシベリア及び極東地域、モンゴル、韓国、北朝鮮、中国、日本に広がる空間を対象としています。 従来は国家の枠組みにおいて研究が行われてきましたが、これらの国・地域を横断的に捉える新たな試みであるといえます。
なお本拠点は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、早稲田大学総合研究機構現代中国研究所の各拠点とともに、中心拠点として本プロジェクトを推進しています。

ネットワーク型:現代中東地域研究
地球規模の変動下における中東の人間と文化—多元的価値共創社会をめざして

中心拠点「[文化資源]個人空間の再世界化」
代表者:西尾哲夫

現代中東地域研究では、国立民族学博物館を中心拠点とし、その他国内の四拠点と共同で研究活動を進めています。 端的に述べると現代中東地域研究とは、中東地域における「個」と社会(共同体)のあり方の現代的動態に基づき、グローバル化と地域をめぐる双方向の複眼的な分析ベクトルをもって、人類や人間文化という普遍的な価値を視野に入れた研究です。
本拠点では、現代的諸問題を解決するための基盤形成のために中東地域における社会構築のプロセスを、文化知識の資源化プロセスに着目して研究しています。 中東地域を基点として広がる空間においては、世界を形成・構想するうえで、生身の個人が経験する未知なる人・場・情報との遭遇が重要な役割を担っています。 流動する諸個人が暫定的に構築してゆく場の継起・累積から社会を構想する方法を、文化知識の資源化という側面から検討することで、個人が織りなす世界の特質を解明することが可能となります。 そこで(1)「個」から世界への視点による他者観と、(2)社会的心性としての世界観にかかるサブプロジェクトを連携させた活動を実施しています。

ネットワーク型:南アジア地域研究
グローバル化する南アジアの構造変動
—持続的・包摂的・平和的発展のための総合的地域研究

副中心拠点「南アジアの文化と社会」
代表者:三尾 稔

急速な経済発展とともに社会文化も大きく変りつつある南アジア地域の現状は、わが国にとっても到底無視できるものではありません。 本事業は、人文・社会諸科学を中心に自然科学分野とも協働して、地域的一体性の強い南アジア全体の総合的・俯瞰的な理解を深める研究プログラムを推進しています。 このプロジェクトには、副中心拠点である国立民族学博物館をはじめ、京都大学(中心拠点)、東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学の6拠点が参加し、ネットワーク型の共同研究事業を行っています。
民族学博物館拠点では、南アジア発の人や文化・価値の環流状況の解明や社会変化の中でも維持される南アジア的な社会結合の特性の解明を通じ、地域固有の社会的レジリエンスの特徴を抽出し、グローバル化の中で生ずる社会的リスクへの対応という問題解決に貢献します。 また、国際シンポジウムの開催、研究成果の英文叢書の刊行、国際学術協定の拡大、アジアにおける南アジア研究センターコンソーシアムの構築など、拠点事業全体の国際化の推進を担っています。

総合研究大学院大学

総合研究大学院大学は、学部をもたない大学院大学です。18の大学共同利用機関などとの緊密な連係・協力のもと、大学共同利用機関などの開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を深めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性をもった高度な能力を有する研究者の養成を目的としています。

組織図

大学院教育

本館には、総合研究大学院大学の文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）博士後期課程が設置されています。両専攻は、全国の研究者などの共同研究推進に寄与している大学共同利用機関などの人材と研究環境を基盤として、教育・研究をおこなっています。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の目的

教育研究は、個々の教員による授業や研究指導と、複数の教員が指導する共通のゼミナールからなっています。共通のゼミナールには、主に1年次生を対象とする「基礎演習（通称「1年生ゼミナール」）」と、2年次生以上を対象に、論文作成の指導を中心とする「演習」（通称「論文ゼミナール」）があります。

また、主として1年次生を対象として、文化人類学・民族学にかかわる共通科目（特論）が開講されています。

これは、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、大阪大学大学院人間科学研究科、神戸大学大学院の国際文化学研究科、人間発達環境学研究科の2研究科との、学生交流協定に基づく単位互換対象科目にもなっています。

学生はおおむね1年次においてフィールドワーク（現地調査）の準備をすすめ、2年次以降、指導教員の指導のもとに調査地でのフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミナール」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。両専攻の教育研究目的は、次のとおりです。

I. 文化人類学・民族学の独創的な研究

II. 長期のフィールドワークでえられた資料にもとづく学位論文の作成

III. 広い視野をもった、人間性豊かな研究者の養成

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

平成31年4月1日現在

大学院入学定員および現員

専攻	入学定員	現員 1年次	現員 2年次	現員 3年次	計	備考
地域文化学専攻	3	3	6	8	17	
比較文化学専攻	3	2	1	12	15	
計	6	5	7	20	32人	

年度別学位記授与者数

年度	地域文化学専攻 課程博士	地域文化学専攻 論文博士	比較文化学専攻 課程博士	比較文化学専攻 論文博士	計
平成3年度			1		1
平成4年度					
平成5年度			1	1	2
平成6年度	2		1		3
平成7年度	2		1		3
平成8年度		3			3
平成9年度	3		4		7
平成10年度	4	2			6
平成11年度					
平成12年度	2		2	1	5
平成13年度	1	1	2	1	5
平成14年度	1	1		2	4
平成15年度					
平成16年度	2	3			5
平成17年度	4	2		2	8
平成18年度	2		3		5
平成19年度	2	1	3		6
平成20年度	1		1		2
平成21年度		1	1	1	3
平成22年度	2		2	3	7
平成23年度	3		1	1	5
平成24年度	1	1	1	1	4
平成25年度			1	1	2
平成26年度	2	1	2		5
平成27年度	3	1			4
平成28年度	1	1	1		3
平成29年度	1		1		2
平成30年度	1				1
計	39	18	29	14	101人

論文博士号取得希望者の受入

日本学術振興会が実施する「論文博士号取得希望者に対する支援事業」の支援を受ける者（論博研究者）が、大学院の受入研究科において研究指導にあたる教員の下、研究をおこないます。

利用案内

開館時間

開館時間　10：00 ～ 17：00　（入館は16：30まで）
休館日　水曜日　（水曜日が祝日の場合は、翌日が休館）
年末年始　（12月28日～1月4日）

観覧料

区分	個人	団体（20名以上）及び割引※
一般	580円	490円
大学生	250円	200円
高校生以下	無料	

特別展はその都度別に定めます

障がい者手帳をお持ちの方は、付添者1名とともに無料で観覧できます。
日本文化人類学会会員及びICOM（国際博物館会議）会員・日本博物館協会会員の方は、無料で観覧できます。（要会員証）

※以下の方々は、割引料金で観覧できます。
　20名以上の団体、大学等*の授業でご利用の方、
　3ヶ月以内のリピーター、満65歳以上の方（要証明書等）
　*大学等は、短大、大学、大学院、専修学校の専門課程
※なお、短大生・大学生・大学院生の方は、教員が同行し、授業で展示場を利用する場合は、事前にお申し込みいただくと、観覧料が無料になります。詳しくはお問い合わせください。
（自然文化園各ゲートで本館の観覧券をお買い求めの場合は、本館窓口で差額を返却いたします。）

お問い合わせ先　Tel.06-6876-2151（代）　Fax.06-6875-0401

ホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/

案内・サービス

■国立民族学博物館友の会　お問い合わせ先：Tel.06-6877-8893（千里文化財団）　本館1階エントランスホール「友の会カウンター」
「国立民族学博物館友の会」では、本館研究者の協力のもとに、『季刊民族学』を発行し、多様な文化に直接ふれる「研修の旅」や「体験セミナー」、各種講演会などを催しています。

■ミュージアム・ショップ　（営業時間 10:00～17:00）　お問い合わせ先：Tel.06-6876-3112
世界各国の工芸品や文化人類学・民族学に関する書籍などを購入することができます。

■レストラン　（営業時間 11:00～16:30　ラストオーダー16:00）　お問い合わせ先：Tel.06-6876-1293
本格エスニックメニューを提供しています。カフェのみのご利用も可能です。
座席数は110席あり、少人数から団体まで予約いただけます。また、団体のお客様については弁当の予約も可能です。

友の会カウンター

ミュージアム・ショップ

レストラン

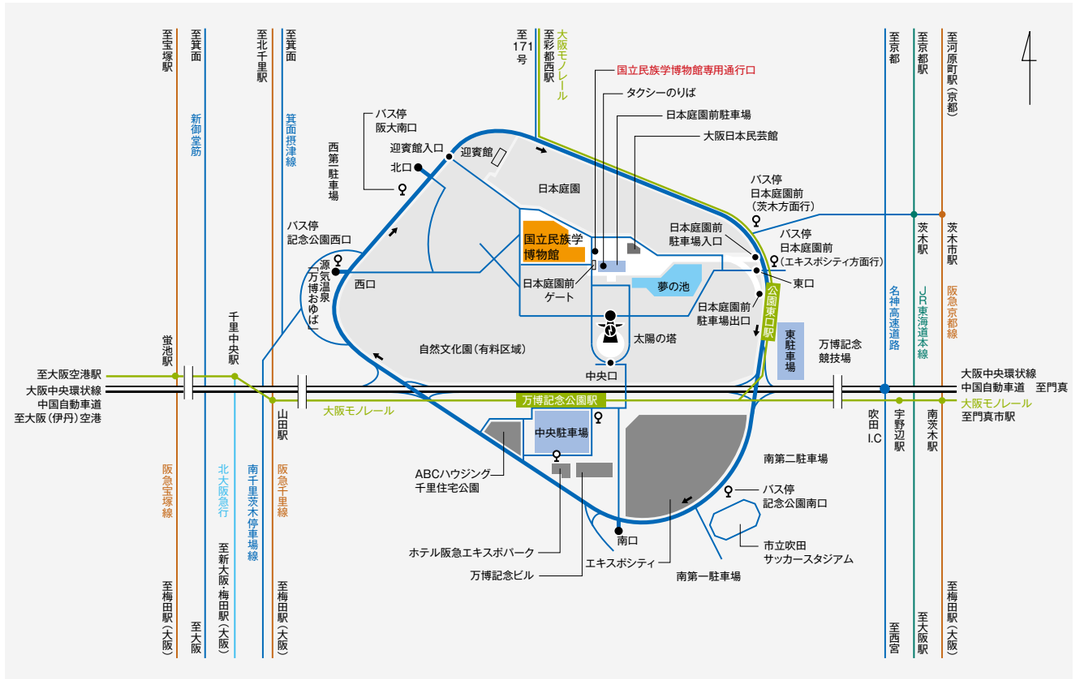
友の会主催「海外民族学研修の旅」

友の会刊行物
『季刊民族学』

交通のご案内

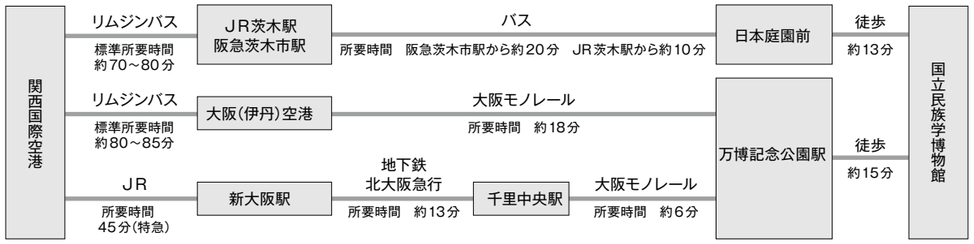
● 大阪・万博記念公園内
○ 大阪モノレール …「万博記念公園駅」または「公園東口駅」下車徒歩約15分
○ バス…阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約13分
○ 乗用車…万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分
○ タクシー…万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。
「日本庭園前駐車場」を利用される方は、「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
※ 自然文化園（中央口、西口、北口）窓口で、当館の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。
※ 東口からは、自然文化園（有料区域）を通行せずに来館できます。
※ 自然文化園（有料区域）をご利用になる場合は、同園入園料が必要です。

周辺図



主要ターミナルからのアクセス

当館までの交通手段はいくつか方法がありますが、主要ターミナルからのアクセスには、次の方法が便利です。



ISSN 1344-5413　2019.7 発行

要覧
2019

国立民族学博物館　〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1